

千葉県匝瑳郡光町

# 芝崎遺跡群

—国道126号山武東総道路建設に伴う埋蔵文化財調査—

本編

(芝崎遺跡・中島遺跡・三反田遺跡・弥平野遺跡)



平成18年3月

千葉県道路公社  
財団法人 東総文化財センター

千葉県匝瑳郡光町  
芝崎遺跡群

—国道126号山武東総道路建設に伴う埋蔵文化財調査—  
本編

(芝崎遺跡・中島遺跡・三反田遺跡・弥平野遺跡)

## 序 文

財団法人東総文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として平成3年に設立され、以後、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果としての発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、東総文化財センター発掘調査報告書第33集として、国道126号山武東総道路建設に伴って実施した光町芝崎遺跡群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この遺跡群は、九十九里平野の発達に伴って形成された砂州上に営まれた4遺跡からなっています。今回の調査で注目されるのは、砂州上のほぼ全域で発見された畑跡です。また、奈良・平安時代の竪穴住居跡群からなる大規模な集落跡や掘立柱建物跡を中心とする中世の建物群も見逃すことができません。今回の調査は、九十九里平野の発達との地域に住んだ人々の開発の歴史を探る上で極めて大きな成果を得ることができたと思います。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際しご指導、ご協力をいただきました千葉県道路公社、千葉県教育委員会、光町教育委員会の関係機関や地元の方々、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 東総文化財センター  
理事長 江 波 戸 義 治

## 例　　言

1. 本書は、千葉県道路公社による国道126号山武東縦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、以下の4遺跡である。なお遺跡コードのHは光町の頭文字である。数字は、『千葉県埋蔵文化財分布地図』(平成6年)の分布地図に記載されている光町の遺跡番号を使用している。

芝崎遺跡	遺跡コードH47	千葉県匝瑳郡光町芝崎字沖ノ内1329番地ほか
中島遺跡	遺跡コードH49	千葉県匝瑳郡光町芝崎1661番地ほか
弥平野遺跡	遺跡コードH48	千葉県匝瑳郡光町芝崎2090番地ほか
三反田遺跡	遺跡コードH56	千葉県匝瑳郡光町芝崎2425番地ほか
3. 発掘調査は、千葉県道路公社の委託を受けて、千葉県教育委員会及び光町教育委員会の指導のもとに、財團法人東縦文化財センターが実施した。発掘調査及び整理作業の詳しい経緯については、第1章第1節で記した。
4. 本書は、調査課長 蜂屋孝之の指導のもとに主任調査研究員 道澤 明が編集し、主任調査研究員 道澤 明、本多昭宏、調査研究員 白崎智隆、津田憲司が執筆し、それぞれ文責を末尾に記した。
5. 報告をまとめるに当たっての委託作業は以下のとおりである。  
自然科学分析については、古環境研究所に烟跡内白色土の分析を、またパリノ・サーヴェイ株式会社に烟跡土壤、製鉄、木製品樹種、人骨等の分析をそれぞれ委託し、その結果を資料編1・3に掲載した。芝崎遺跡および中島遺跡の全体図、編集図作成、航空写真編集は、中央航業株式会社に委託した。  
空中写真撮影にあたって、測量のための撮影以外は、栗田商事のラジコンヘリコプターを使用した。
6. 遺跡の位置図には国土地理院発行2万5千分の1「多古」「八日市場」「成東」「木戸」を使用している。
- 方眼グリッドの設定は、500m方眼を大グリッドとし、さらに内部を50m方眼に分割して中グリッドとし、さらに10m方眼に分割して小グリッドを設定している。表記方法は12E-40-1のようにあらわしている。
7. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記、諸機関・諸氏のご指導とご協力をいただきました。記して御礼申しあげます。

(財)千葉県教育振興財団、(財)香取都市文化財センター、(財)山武都市文化財センター

小野正敏(貿易陶磁分析)、藤沢良祐(瀬戸・美濃製品分析)、能登健・閑敏明・小島敦子(烟跡分析)、上杉陽・上本進二・近藤敏(白色土分析)、杉原重夫(白色土分析)、柿沼修平・中野晴久・國下多美樹、森下衛・田所享・加瀬庄治・小高春男・大谷弘幸・柴田剛・築瀬裕一・津田芳男・柴田龍司・井上哲郎、道上文・黒澤哲郎・北澤滋・當眞嗣史・小牧美知枝・加藤有花・鈴木敏則・後藤建一・萩原恭一、小林信一、

光町生涯学習講座古代ロマン発見講座受講生——野村俊二・野村加津子・鶴之沢正夫・鈴木益郎、土屋敦・伊藤嘉映・越川毅・樋口広三・大木洋子・長嶋千代美・椎名聰子・道澤道子・福元省蔵、福元アイ子・加藤松男・加藤スミ・大胡正寿・大胡博子・市原勝・小椋幸枝・深田隆明・高梨キヨ

## 目 次

序文

例言

### I. 調査の概要

1. 調査の経緯	1
2. 調査経過及び調査組織	1

### II. 遺跡の概要

1. 遺跡の環境	5
(1) 自然環境と地形	5
(2) 歴史環境と周辺の遺跡分布	9
2. 各遺跡の概要	
(1) 芝崎遺跡	10
(2) 中島遺跡	13
(3) 三反田遺跡	14
(4) 弥平野遺跡	15

### III. 調査成果

1. 縄文時代	16
(1) 遺構について	16
(2) 遺物について	16
2. 弥生・古墳時代	
(1) 有角石器について	22
(2) 土器について	24
(3) 玉について	24
3. 奈良・平安時代	
(1) 集落と烟跡の変遷	25
(2) 烟跡について	37
(3) 住居跡について	39
(4) 掘立柱建物跡について	40
(5) 奈良・平安時代の土師器について	41
(6) 赤い土器、青い陶器	51
(7) 都から来た土器	52
(8) 土器に書かれた文字・記号	53
(9) 錫冶遺構について	59
(10) その他	66
4. 鎌倉・室町時代	67
(1) 集落と居館の変遷について	68
(2) 出土遺物について	73
1) 陶磁器について	74
2) 木製品について	82
3) 砥石について	82
4) 土錐について	84
5. 安土桃山・江戸時代	
(1) 遺構について	85
(2) 遺物について	86
6. 調査成果のまとめ	87
報告書抄録	88

## I. 調査の概要

### 1. 調査の経緯

千葉県道路公社は、千葉県匝瑳郡光町芝崎地先に有料道路の建設を計画し、平成11年5月13日付けで埋蔵文化財の有無及びその取扱いについての照会を光町教育委員会経由で千葉県教育委員会あてに提出した。事業区域内に所在する遺跡の取扱いについて、千葉県道路公社と千葉県教育庁文化財課及び光町教育委員会との協議の結果、工事の変更が困難な状況であることからやむを得ず発掘調査を行って、記録保存の措置を講ずることになった。事業区域内に所在する遺跡は、芝崎遺跡、中島遺跡、弥平野遺跡、三反田遺跡の4遺跡である。発掘調査及び整理作業は、財団法人東総文化財センターが千葉県道路公社からの委託を受け実施した。

### 2. 調査経過と調査組織

各遺跡の発掘調査及び整理作業の実施期間・担当職員は以下のとおりである。なお、芝崎遺跡については、途中から栗山川に面する区域について河川改修の一部事業も加わったため、その部分について芝崎遺跡2として発掘調査にあたっている。報告書をまとめるにあたり、便宜的に区分けした芝崎遺跡2については、本来同一の遺跡であることから一遺跡としてまとめて報告することとした。

平成11年度

確認調査 芝崎遺跡 2,120m<sup>2</sup> (当初対象面積 21,200m<sup>2</sup>のうちの10%)

期間 平成12年1月7日～平成12年1月31日

本調査 芝崎遺跡 3,100m<sup>2</sup>

期間 平成12年2月1日～平成12年3月31日

担当職員 調査課長 横山 仁 主任調査研究員 道澤 明



写真1 芝崎遺跡の重機掘削による確認調査



写真2 芝崎遺跡の人手による確認調査



写真3 芝崎遺跡確認調査の様子



写真4 芝崎遺跡確認調査で検出した遺構

平成12年度

本 調 査 芝崎遺跡 10,000m<sup>2</sup>

確認調査 中島遺跡 780m<sup>2</sup> (当初対象面積 7,800m<sup>2</sup>のうちの10%)

確認調査 三反田遺跡 82m<sup>2</sup> (対象面積 820m<sup>2</sup>のうちの10%)

本 調 査 三反田遺跡 820m<sup>2</sup>

確認調査 弥平野遺跡 200m<sup>2</sup> (対象面積 2,000m<sup>2</sup>のうちの10%)

期 間 平成12年 7月 1日～平成13年 3月 30日

担当職員 調査課長 岸本雅人 主任調査研究員 道澤 明、本多昭宏

平成13年度

本 調 査 芝崎遺跡 20,800m<sup>2</sup>

期 間 平成13年 4月 5日～平成14年 3月 26日

担当職員 調査課長 岸本雅人 主任調査研究員 道澤 明、本多昭宏、調査研究 白崎智隆

平成14年度

本 調 査 中島遺跡 7,800m<sup>2</sup>

本 調 査 弥平野遺跡 810m<sup>2</sup>

期 間 平成14年 4月 1日～平成15年 2月 13日

担当職員 調査課長 岸本雅人 主任調査研究員 道澤 明

平成15年度

本 調 査 3,300m<sup>2</sup>

期 間 平成15年 7月 14日～平成16年 3月 18日

担当職員 調査課長 蜂屋孝之 主任調査研究員 道澤 明

平成16年度

本 調 査 700m<sup>2</sup>

期 間 平成17年 2月 1日～平成17年 3月 2日

担当職員 調査課長 蜂屋孝之 主任調査研究員 道澤 明

整理作業 芝崎遺跡、中島遺跡、三反田遺跡、弥平野遺跡

期 間 平成16年 4月 1日から平成17年 3月 31日

担当職員 調査課長 蜂屋孝之 主任調査研究員 道澤 明、調査研究員 白崎智隆、津田憲司

平成17年度

整理作業 芝崎遺跡、中島遺跡、三反田遺跡、弥平野遺跡

期 間 平成17年 4月 1日から平成18年 2月 28日

担当職員 調査課長 蜂屋孝之 主任調査研究員 道澤 明、調査研究員 白崎智隆、津田憲司

事務局

財団法人東経文化財センター庶務課

常務理事兼庶務課長 大島 正夫

庶務係長 遠藤 喜枝 (平成12年 1月～13年 3月)

及川ゆり子 (平成13年 4月～14年 3月)

角田奈緒子 (平成14年 4月～)

庶務係 片岡 秀子

#### 調査補助員

石井睦子、石下ひさ子、伊藤幸子、宇野文子、遠藤せい、角田照代、加瀬五十鈴、川口トシ江、佐藤和子、佐藤恵美子、鈴木敏明、鈴木さとみ、鈴木みよし、平野紘子、三田雅也、山口水雄、森輝男、飯田勝恵、石井圭子、石井チヨ子、宇井末子、大川義夫、大木和子、押尾栄子、小野寺一子、小野寺善宣、柏熊千恵子、鎌木翠、川島幸子、川島弘子、佐藤輝江、塚本せつ、塚本治子、都築愛子、中村睦子、林久子、林美津枝、藤井和子、水口キヨ、官負寛子、行本臣、渡辺完子、北野新市、石上初江、大根淳一、近江谷忠雄、岡野のぶ子、加川桂子、加瀬恭子、加瀬光子、金井真弓、釜形智恵子、久保広子、佐野正明、椎名町子、鳩田亜矢、高森郁江、浪川一夫、野澤昌弘、布川弘子、松島浩次、向後しめ、鈴木美恵子、木川宏一。

機械掘削 (有)小川重機 小川義弘、小川勉、向後憲一

#### 整理作業補助員

向後幸子、菅原喜久美、林りか、高木みどり、高橋淳子、伊藤昌子、長沢照美、平山礼子



写真5 芝崎遺跡発掘作業風景



写真6 中島遺跡遺構検出作業



写真7 芝崎遺跡遺構実測作業



写真8 中島遺跡井戸跡発掘作業



写真9 調査補助員



写真10 整理作業風景

ボランティア体験発掘

光町生涯学習講座受講生（前掲）



写真11 中島遺跡の体験発掘風景



写真12 芝崎遺跡の体験発掘参加者

小学校体験発掘（平成13年6月6日）

光町立東陽小学校5・6年生計77名参加



写真13 小学生体験発掘風景

現地説明会

芝崎遺跡現地説明会（平成13年2月10日）

中島遺跡現地見学会（平成14年12月21日）



写真14 芝崎遺跡現地説明会風景



写真15 中島遺跡見学会出土資料展示

## II. 遺跡の概要

### 1. 遺跡の環境

#### (1) 自然環境と地形

遺跡が所在する光町は、太平洋の波が洗う千葉県北東部に広がる九十九里浜のほぼ中央部に位置し、太平洋に注ぐ栗山川の左岸に沿って南北10km、東西2kmの細長い町である。同町は南半分を平坦な九十九里平野の低地部と、北半分を侵食が進んだ下総台地が点在する台地部とに、大きく二つの地域に分けられ、地形だけでなく人文的な区別も古来より存在してきた。町の気候は太平洋に接して温暖で、冬はほとんど雪が降ることはなく、夏は海風が吹いて温和である。

その様な所での植生は、山林では椎・櫻・椿・楓等の暖地性照葉樹林が卓越し、海岸部は黒松に代表される海岸林で構成される。特に台地の斜面部や、平野の微高地などに照葉樹林が分布して、いわゆる里山を構成している。このような半人工的に残された自然環境にも野生動物が生息し、近年狸が増えただけでなく、鷹・隼・サシバなどの猛禽類も見られる。芝崎遺跡群の周囲に広がる低湿地は水田に利用され、休耕になるとオモダカ、ヒルムシロなどの湿性植物が出現し、湿原では葦が繁茂している。また町内でも後背湿地が池として残されているところでは、蓮や菱の群落が見られる。このような水場には鯉や鰐、ドジョウ、ナマズなどが生息し、遺跡にも帶水期にはこれらの魚が遡ってくる。

芝崎遺跡群は光町の台地部と平野部との境目で、台地南端下に広がる平野の低地の中の微高地に立地する。微高地の標高は現高で3~4m、発掘時で2~4m、低地では2~3m程度で、非常に低い所である。そのため大雨が降ったときには遺跡が浸水し、作業が不可能になることが度々あった。遺跡が立地する微高地は、九十九里平野に多数見られる砂堤列のひとつで、砂州で形成され、その地盤は軟弱な砂の堆積によってなる。これは氷河時代が終わって完新世以降、海水面の上昇によってこの地が海岸となっていたときに堆積した砂で、この砂の堆積と海岸の前進で今日のような九十九里平野が形成された。そのため地質的には最も新しい地層であるところから、軟弱である。この砂州の上には粘質の黒色土が、遺構を保護するように数10cm堆積していた。これは10年に一度は氾濫するといわれる栗山川が運んで堆積した土砂と思われ、粘性が強く、地元でもかつてこの土を原料に瓦を焼いていたと言う。遺構のほとんどにこの土が堆積し、また下層ほど黒さが強く、上層ほど茶褐色を帯びてくる。地元では現在この微高地を畑として利用しているが、この黒土のみだと粘性が強いため、耕すことが困難なところから、砂を客土し黒土と混ぜ合わせて耕すことによって、ようやく良好な畑地に変えることができたとの話も耳にした。そのため、上層は70cm~1mの厚い堆積となり、加えてこの地域は近年の耕地整理が実施されず、昔のままの地形と地割が残されていたために、結果として奇蹟的に遺跡がよく保存され、多数の遺構が検出された。図2には明治時代に作成された迅速図を載せたが、これによると現在では畑となってなくなっている道が、芝崎から横江町両国新田に向かっていることが見える。また第二次世界大戦直後までは栗山川の芝崎付近に渡船が在ったといわれ、その道上にそれがあったと思われる。

#### 図 遺跡位置図上の主な遺跡

1 芝崎遺跡	(縄文、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸)	11 篠本城跡 (鎌倉、室町)
2 中島遺跡	(縄文、奈良、平安、鎌倉、室町)	12 新台遺跡 (縄文、平安、室町)
3 三反田遺跡	(縄文、江戸)	13 神山谷遺跡(縄文、弥生、古墳、奈良、平安)
4 弥平野遺跡	(縄文、江戸)	14 龍ヶ塚遺跡(古墳、奈良、平安)
5 芝崎虫生台地上遺跡(縄文、古墳、奈良、平安)		15 庚申塚遺跡(奈良、平安)
6 芝崎城跡	(室町)	16 宮内前遺跡(古墳、奈良、平安)
7 傍示戸遺跡・城跡	(古墳、奈良、平安、室町)	
8 小田部遺跡	(奈良、平安)	
9 小川台古墳群	(古墳)	
10 坂田城跡	(室町)	

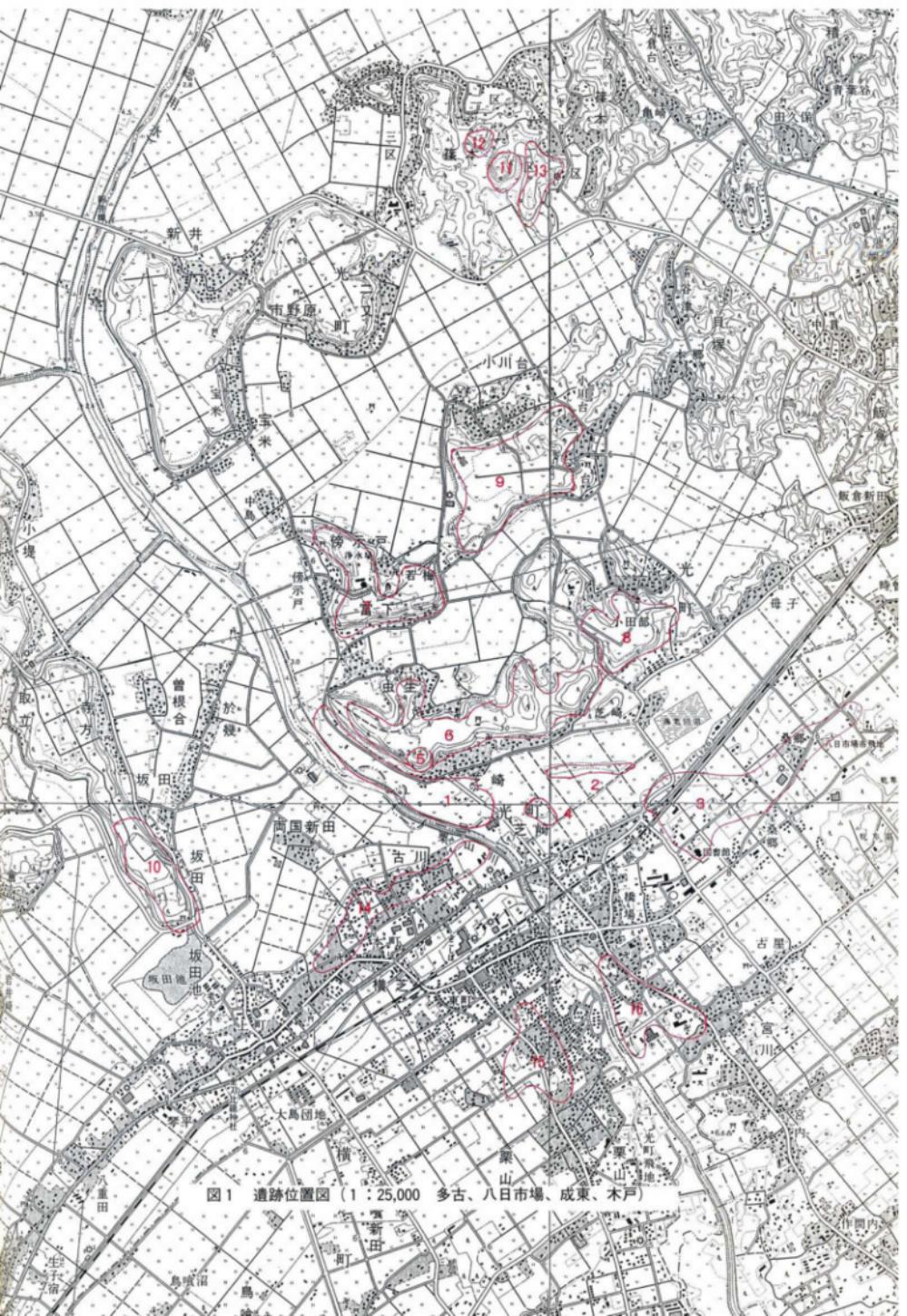
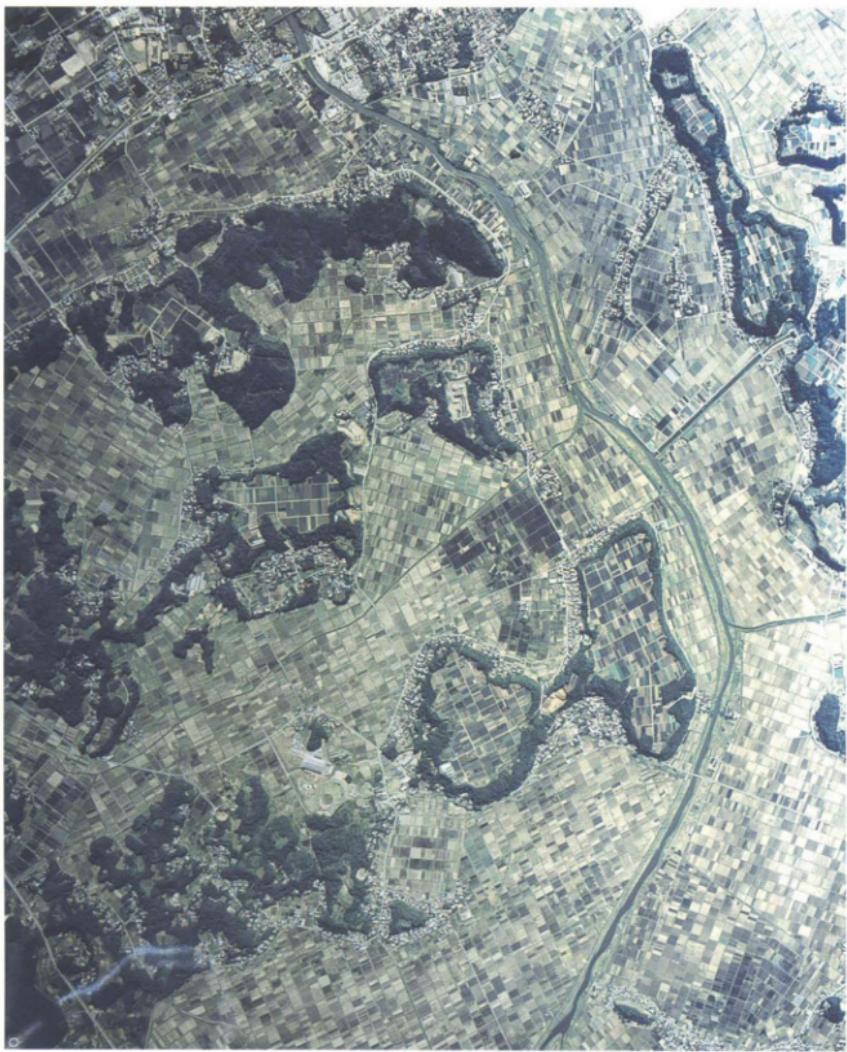


図1 遺跡位置図 (1:25,000 多古、八日市場、成東、木戸)

図2 沿線図 (1:20,000 八日市地図)



写真16 光町北部の航空測量写真



## (2) 歴史環境と周辺の遺跡分布

本事業で埋蔵文化財調査した遺跡は、仮に芝崎遺跡群とした芝崎遺跡、中島遺跡、三反田遺跡、弥平野遺跡の4遺跡で、これらは標高3~4mの平野の微高地に立地し、遺物量の多少はあるが、4遺跡いずれからも縄文時代から江戸時代までの資料が出土した。周辺の平野（三反田遺跡南部）でも過去に縄文土器の出土が報告され、町でその資料が保管されている。また遺跡群北部には東西に長く下総台地南東端部が迫り、その台地上に縄文遺跡が数箇所確認できる。すぐ北の台地上には虫生遺跡（縄文早期、古墳、奈良・平安）、少し東に行つたところには虫生駒形遺跡（縄文中期、古墳、奈良・平安）など遺跡群と関連すると思われる遺跡が分布する。この両遺跡の間には芝崎古墳群があり、また、台地上各所に中世城郭（芝崎城跡、田中砦跡、中の城跡、古城跡、駒形城跡、小田部砦跡）が点在し、遺跡群と関連すると思われる遺跡が多く分布する。芝崎・虫生の台地を越えると、その台地下には国指定重要無形民俗文化財「鬼来迎」を演じる広濟寺、その東方には「鬼来迎」の元となった鬼堂跡（中世寺院跡）があり、谷を越えて北の台地上には傍示戸城跡がある。芝崎から栗山川を越えて西方を眺めると、南へ突き出した台地を遠望することができる。これが横芝町にある中世末期の坂田城跡である。また町内に戻って、町北部には10年ほど前に発掘調査した篠本城跡がある。このようにこの地域には城郭をはじめとする中世遺跡が多数分布し、今日でも城跡の多くはその面影を伝え、中世遺物の名残をとどめる板碑を各所で散見できる。また町内寺院のいくつかでは、中世に造立されたとされ、千葉県指定重要文化財に指定される仏像が残され、中世文化がこの地に栄えたことを知ることができる。

話は古代に戻って、奈良・平安時代ではこの地域は下総国匝瑳郡岩室郷が知られ、今日でも芝崎から北方1kmほどの所に岩室の地名が残され、芝崎遺跡群もこの郷の範囲に含まれていたと考えられる。東大寺正倉院に収められている麻布の一つが、この岩室郷から産したものであると記録されている。

のことからこの岩室郷がその当時、良質な麻布の産地であったことが推定される。中世になるとこの地域は南条の庄と呼ばれ、熊野神社領の荘園になったと思われる。熊野神社は今日でも町内宮川字宮内前に入り、おそらく平安時代にはすでに鎮座していたと思われ、今日でも神樂が伝えられる町の代表的神社として町民の尊崇を集めている。平安時代後期、「蟻の熊野詣」と言われるほど熊野信仰が流行った頃、この九十九里地域にも熊野神社が展開したものと思われる。またその力を頼って在地領主が神社に土地を寄進し、神社領荘園として保護を求めた結果、南条の庄が成立したと推定される。中世には千葉氏庶流の椎名氏が匝瑳郡に入り、次第に荘園を自領化し、分家して各地に城館を築いて領有していく。そういった城館の例が芝崎城跡や、調査で検出した中島遺跡であったろうと考えられる。しかし江戸時代になるとき、徳川家康の関東入部によってこの地域は幕府領あるいは佐倉藩領となり、鎌倉以来の中世領主は帰農させられ、その地を耕すことを義務付けられ、今日に至ったと思われる。

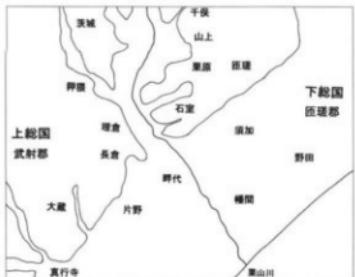


図3 芝崎遺跡周辺の古代地名



図4 芝崎遺跡周辺の中世地名

## 2. 各遺跡の概要

### (1) 芝崎遺跡

芝崎遺跡は面積約150,000m<sup>2</sup>あって、遺跡群の中でもっとも規模が広く、本事業埋蔵文化財調査はその南部中央部を貫く約35,000m<sup>2</sup>および、これも最も広い面積であった。その調査範囲は東西に500m、幅60mの帯状に、さらに栗山川に沿って幅40m、長さ140mを加え、レの字を横にしたように発掘調査した。

芝崎遺跡の発掘調査の結果、最も古いものでは縄文時代中～後期の土器・石器が調査区域全体から出土し、遺構では東端部で後期の竪穴遺構が1基検出されたのみである。

弥生時代の遺構・遺物は全く無く、古墳時代では土器・勾玉が出土した程度である。

奈良・平安時代になると、住居跡、掘立柱建物跡のほか、ほぼ全域から幅30cm、深さ5～20cmほどの溝が多数検出された。この溝は平均1m間隔で、長さが10m～30m、10～30条が平行して走り、溝の底には鍬先痕と思われる窪みが連続して検出された。この溝は出土遺物から奈良・平安時代の遺構で、畑跡と推定されたところ、畑跡の調査を多く手がけている群馬県埋蔵文化財団の能登氏他が来跡され、検証いただいた結果、古代の畑跡に間違いないとの回答をいただいた。同時代溝の中には幅、深さが一回り大きく、何よりも遺物が多数出土している。これは畑を区画する溝と思われ、中には100m以上も続くものがある。このような畑跡の溝は、多くの場合意識的に地山の砂層まで掘り起こしていることに気付く。これは前にも述べたように、上層の粘質の黒土と砂とを混ぜて、耕作しやすい土を作るために、まず畑を開墾したときに行われた初期作業の跡であったと思われる。もちろんこのときに掘り起こされてできた溝が、畑の畝溝としたことも考えられる。

奈良・平安時代の住居跡は発掘区域のはば全域から総計で210軒検出、多くの所で同時代畑跡と重なり、両者の関係が問題になり、多くの来跡者からも指摘された。整理段階での分析の結果、奈良・平安時代の集落が存続した約300年間に、住居と畑とを頻繁に場所を変えながら、営まれたことが明らかになった。それに対して遺跡中央部で検出された掘立柱建物跡群のある所は、奈良時代初期の畑跡が確認できた以外、その後の畑耕作が認められず、ここが建物跡群の占地として継続的に使用される特別な場所であったことが推定される。ちなみにこの場所は、ほとんど平坦な芝崎遺跡で標高4mになる最も高いところに当たる。これらの詳しい変遷については後述する。

中世の鎌倉・室町時代になると、平安時代の住居跡のような竪穴住居跡はなくなり、掘立柱建物跡と呼ばれる上屋に高床と土間とを併せ持った住居であったと推定される。そのため住居遺構は柱穴しか検出できず、その概要を把握することを難しくしている。また中世になるとなぜか遺物が少なくなり、古代のような土師器・須恵器はなくなり、わずかな土器小皿（カワラケ）以外は陶磁器が主体となる。芝崎遺跡では、平安時代末期と思われる中国製白磁が出土し、鎌倉時代になると各種陶磁器が出土するようになって、建物跡や溝などの遺構もぼつぼつ見られるようになり、時代が下るに随って少しづつ増えている。ことに室町時代になると浅く幅広の溝が現れ、その走行が北東～南西方向になっている。北東では芝崎の台地下に沿って銚子に向かい、南西では栗山川を渡って坂田城跡に向かうように延びている。中でも調査区域中央から少し西よりのところで検出した道跡は、近世にも続き、自然環境と地形の項で述べた旧道にも重なるところから、長く存続した道であったようである。調査区域の東部からは中世の畑跡も検出され、ここが農村集落であったことが確認できる。

近世安土桃山・江戸時代になると、芝崎遺跡では建物跡は見られなくなり、遺構は溝がほとんどである。この溝は幅3～5m、深さ1m未溝がほとんどで、多くは調査前の畑地割の下から検出されるが多く、また発掘した溝も隣接する未調査区の地割の下に延長している。このことから現在不規則にある芝崎の畑地割は、江戸時代に作られたものが今日まで継続していることが判明した。



写真17 芝崎遺跡



図5 芝崎遺跡



全体空中合成写真



全体図（縮尺 1:1,400）

## (2) 中島遺跡

中島遺跡は、芝崎遺跡から東へ500mほど行った周りを水田に囲まれた砂州上の微高地に立地し、まさに名が示すように島のような景観を示す遺跡である。東西500m、南北60mの細長い砂州で、九十九里平野の砂堤列のうちで最も小規模、且つ最も古く形成されたものの一つである。発掘調査はこの細長い砂州上の遺跡のはば西半分と東部の一部を対象として実施した。調査の結果、芝崎遺跡同様、同時代の遺構・遺物が多数出土し、両遺跡の関連性も考えられる有意義な発掘ができた。

発掘で出土したものを古いほうから示すと、縄文中～後期の土器が多数出土したのに対し、遺構では後期初頭の炉跡と思われる小坑が1基検出されたのみである。土器も後期初頭のものが多く、資料が少ないこの地域に、空白を埋める貴重なものとなろう。

弥生時代では有角石器が1点出土したが、同時代の土器は全く出土せず、この石器がどういう因果でここに存在したか想像できない。詳しくは後述する。古墳時代では中～後期の土師器や勾玉などが出土したが、同時代の遺構は検出されなかった。

奈良・平安時代になると遺物が急速に増え、遺構も住居跡1軒に対し、掘立柱建物跡が22棟もあり、他に土坑、井戸跡に加え、烟跡がほぼ全域から検出された。中島遺跡で特に注目されるのは、22棟検出された掘立柱建物跡群のあり方と、その周辺から出土した遺物である。掘立柱建物跡群は調査区域の西部にあり、その中最盛期の建物跡を抽出すると、建物跡群の中心にいわゆる四面廂付建物跡が位置し西側に柄柱を持つ建物跡が南北に3棟並び、北側に規模の異なる建物跡が東西に4棟、東側は後世の遺構によって失われている部分があるが2棟を検出した。これら建物跡群の立ち並びを概観すると、中央四面廂付建物跡をコの字に開む構造であることが想像できる。そしてこの建物跡群の南東には、井桁に木棒を組んだ井戸跡が検出された。これらの遺構の周辺からは、綠釉陶器や灰釉陶器の碗・皿の破片が多数出土した。綠釉陶器は出土例が少なく、一般的な住居跡からはほとんど出土することはなく、特別な遺構（施設）に伴うものとされている。県内でも市原市の上総国府推定遺跡の稻荷台遺跡で大量の綠釉陶器が出土しているほかは、あまりまとまった出土例は聞かない。また、特殊な遺物としては、南側の低いところから、須恵器の三足壺の破片が出土した。三足壺は中国の青磁鏡の模倣品といわれ、全国的にも出土例が少ない器である。このように中島遺跡のこの掘立柱建物跡群とその周辺出土の遺物群とをあわせて考えると、ここに特殊な施設があったことを想像させる。その施設が何であつたかは議論の余地が充分にあり、詳しくは後述する。

中世では発掘区域の中央部で溝に囲まれた居館跡が2箇所検出され、多数の陶磁器が出土した。陶磁器の中には平安時代末期の中国製青磁や渥美産焼結陶があり、中世黎明期の12世紀にはここに居館の息吹が芽生えたと思われる。この居館が最も栄えたのは15世紀前半の室町時代中期と思われ、この時期の陶磁器の点数がもっとも多い。しかし15世紀半ば以降の陶磁器がなくなるため、この時期を境にして中島遺跡の居館が廃絶したと推定される。この居館跡の中には多数の掘立柱建物跡の柱穴が多数検出され、正直、建物跡の構造がほとんど分からなかったというのが本音である。それだけここに集中して約300年間建物が繰り返し建て直され、居館が営まれたということであり、また、当時周りを湿地に囲まれ、不便であったと引き換えに、周りとの隔離防御性があったという利点があったことが、ここが選ばれた理由であろうか。その点、平安時代の特殊施設との共通性が見られて、興味深い遺跡のあり方を示している。



写真18 中島遺跡空中写真



図6 中島遺跡全体図 (縮尺 1:1,400)

中島遺跡では、近世以降の遺構は埋め戻しがあった以外になく、遺物も極わずかであった。

### (3) 三反田遺跡

三反田遺跡は中島遺跡より南東へ300mほどいった砂州上に立地し、その砂州上を走る現在の国道に接している。砂州の標高は4.0~4.5mを測り、国道の南側では砂丘状に高くなっているところも見られる。調査は東西に伸びる砂州をほぼ直角に横断するように、30×100mの範囲を発掘した。発掘の結果、縄文後期の土器と同期の炉跡、近世の溝などが検出された。縄文時代の遺構・遺物は主に北部の砂州斜面部で検出され、南部から土器片が20点ほど出土した。縄文土器は後期前葉のものがほとんどであるが、1点早期後葉の土器片が出土し、砂州形成年代の推定を大きく巡る資料となろう。縄文後期の土器は、砂州斜面部で集中して出土したものが多く、中には形を復元できるものもあり、また同期炉跡も検出されたところから、ここで同期縄文人が活動していたことが考えられる。平安時代では土坑が1基と土師器・須恵器片が出土した。中でも墨書きされた土器

器環片が3点出土したが、いずれも小片で、文字は不明である。時代は下って江戸時代では竪穴遺構・土坑・溝などの遺構と、陶磁器・砥石などの遺物が出土した。溝は畑区画あるいは畑畝溝と思われ、竪穴遺構・土坑はどういう目的の遺構か不明である。

#### (4) 弥平野遺跡

弥平野遺跡は中島遺跡より南へ200mほど行ったやはり水田に囲まれた砂州上に立地する。遺跡範囲は圃場整備により旧地形とは異なる不整形な形となり、その北側に飛び出した箇所が調査対象となった。発掘した遺構確認面の標高は4mを下回り、周りの水田より低く、水に浸ることが多くなっている。検出した遺構・遺物は縄文時代後期の土器、平安時代と思われる土坑・溝、江戸時代以降の溝・道跡などである。縄文後期の土器は地山砂直上の暗灰色土層の中から出土し、調査区域全体に分布していたが、特に東部隅で多く出土した。土器は後期中葉にまとまり、ほとんどが破片であるが形を復元できるものも数点あり、遺構は検出されなかつたものの、縄文人が一時期ここで活動していたこと暗示している。東部隅の縄文土器分布と重なって検出した溝は、不整形な形態で暗灰色土が堆積し、年代的には古いと考えられるが特定できない。また、1・2号土坑も暗灰色土・灰色砂などが堆積し、年代的には古いと考えられるが、砂地に湧水で崩れやすく、平面形態が不整形であることなどから、年代・性格は特定できない。そのほかの溝・土坑・道跡などは、覆土が軟弱で黒褐色土で、出土遺物も江戸時代以降の陶磁器が出土していることから、近世のものであることが分かる。これら近世遺構は畑に関係するものと考えられるが、道跡以外は具体的にどういう目的で掘られたものか想像することは難しい。



写真19 三反田遺跡空中写真



写真20 弥平野遺跡空中写真

### III. 調査成果

#### 1. 縄文時代

##### (1) 遺構について

縄文時代の遺構は出土土器の多さに対して全体的に少なく、芝崎遺跡では竪穴遺構1基、中島遺跡では炉跡様の土坑1基、三反田遺跡では炉跡が1基それぞれあったのみで、住居跡は全く検出されなかつた。これには遺跡の立地が低地の砂州上であるため、定住的な住居を構えることをせず、漁撈活動をするための一時滞在的な場であったことや、砂地であるため竪穴住居を建てにくかったか、住居を建ててもその跡が残りにくい状況が考えられる。



写真21 芝崎遺跡の竪穴遺構



写真22 中島遺跡の炉跡様土坑



写真23 三反田遺跡の縄文土器出土状態



写真24 中島遺跡の縄文土器出土状態

##### (2) 遺物について

縄文時代の遺物は、芝崎遺跡、中島遺跡、弥平野遺跡、三反田遺跡の4遺跡で、中期から後期にかけての土器や石器が多数出土した。特に芝崎遺跡では遺跡東端部の緩傾斜地で後期中葉の土器がまとまって出土し、中島遺跡では中央部で後期初頭の土器が多数出土し、三反田遺跡では後期前葉の土器がかたまって出土した。このように芝崎遺跡群では、主に後期の土器が多く出土し、遺跡立地と時期の特徴を示しているが、土器で完全に復元されたものではなく、これら遺跡の成立に何らかの意味を示していると思われる。以下、遺跡ごとに遺物を紹介し、まとめる。

#### 芝崎遺跡

土器の多くは、遺跡東部（12E-40-15）で検出した竪穴遺構から出土したものをお除き、ほとんどが遺構外からの出土である。

出土した土器は、中期の阿玉台式から晩期の荒海式まで幅広い時期のものが認められる。最も出土量が多いのは後期の加曾利B式土器である。図示以外の遺物もテン箱3箱のうち2箱は、加曾利B式の粗製土器が大半を占めていた。このほか、早期撫糸文系の土器片が1点出土しており注目される。石器は石鎌2点、打製石斧1点、磨製石斧3点、蔽石（磨石）4点、石皿1点、石核1点、剥片1点が出土した。石材は、石鎌と剥片が黒曜石とチャート、それ以外は砂岩と安山岩を利用している。

遺構外から出土した遺物の分布は、調査区南部の栗山側沿いと調査区東端部に偏る傾向にある。特に東端部では、標高2.7~2.3mにかけての傾斜面に後期の加曾利B式から曾谷式の土器が集中しており、土偶も出土している。しかし、竪穴遺構の周辺では、ほとんど遺物が出土していない。また、栗山川沿いの一部（12E-62）では、古代以降に堆積した砂層とは明らかに異なる粗砂粒の堆積層から、晩期の土器がまとまって出土しており、これが本来の縄文時代の包含層となるのかかもしれない。

調査区中央部の、標高4.0mの比較的標高の高い場所では遺物の分布が希薄であり、出土する土器は中期の阿玉台式から加曾利E式にかけてのものが大半である。これら中期の土器は、調査区南部や東端部の標高の低い場所で出土した後期から晩期にかけての土器とは分布域が異なっている。



写真25 芝崎遺跡出土の中期の土器

写真26 芝崎遺跡出土の後期の土器



写真27 芝崎遺跡出土の石器



写真28 芝崎・中島遺跡出土の琥珀

## 中島遺跡

中島遺跡で検出した遺構は、後期初頭の称名寺式期の炉跡様の土坑（4号土坑）が1基のみで、遺物の多くは遺構外からの出土である。炉跡様土坑は、調査区の中でも最も高い所（標高4.2m）で検出しており、坑内及び周囲からは称名寺式土器がまとめて出土している。

出土した土器は後期初頭の称名寺式土器が最も多く、続く堀之内式土器も次いで多い。このほか、中期の加曾利E式や後期末葉の安行式の土器も少量出土しているがいずれも小片であり、出土したのは称名寺式から加曾利B式にかけての土器が主体を占める。石器は磨石4点、石皿1点、剥片2点を掲載した。石材は剥片が黒曜石と石英、それ以外は砂岩と安山岩を利用している。

出土遺物の分布をみてみると、砂州上の高い所（標高4.0m前後）と南側低地（標高3.5m以下）の2ヶ所に大きく分けられる。砂州上から出土したのは、称名寺式土器を主体として加曾利E式土器や堀之内式土器など中期末から後期前葉にかけての土器であり、それ以降の加曾利B式土器はほとんど認められない。これに対し、



写真29 中島遺跡出土の縄文土器



写真30 中島遺跡出土の後期初頭の土器



写真31 中島遺跡出土の後期中葉土器

南側低地からは後期の加曾利B式土器を中心し堀之内式土器や少量の安行式土器が出土しており、それ以前の土器はみられない。加曾利B式以降の土器群が、調査区の中でも標高の低い場所から集中して出土する傾向は、芝崎遺跡と同様のものである。

このほか土器片を利用した錘（土器片錘）が、砂州上から6点出土した。1点（12F-18-11）を除いて、遺跡西部の12F-17-10からまとまっての出土である。この周囲から出土した土器には称名寺式土器が目立つが、土器片錘に利用されたのは縄文時代中期から後期の土器であり、やや時期に幅がある。

### 三反田遺跡

出土した遺物は土器のみで、石器は出土していない。出土した土器のほとんどは後期堀之内1式で、その中で1点、早期後半の子母口式土器が出土している。

遺構は炉跡1基のほか、焚き火の痕跡と考えられる遺構25か所を、調査区北側の標高4.5m～4.0mにかけての傾斜面で検出している。遺物は調査区の北側と南側の傾斜面から出土しており、いくつかの集中地点がみられるが、中央部の標高が高い場所では遺物の分布が希薄である。



写真32 三反田遺跡出土の縄文土器

### 弥平野遺跡

弥平野遺跡では、土器が出土したのみで、石器は出土していない。出土した土器は後期加曾利B式土器が主体で、ほかに後期安行1～2式土器が数点出土している。芝崎遺跡に比べて出土点数が少ないにもかかわらず、大型破片や復元出来る個体が目立つ点は中島遺跡の状況に類似する。

出土した遺物は、調査区東側と、調査区西側の2か所にわかれて分布する。しかし、この2ヶ所から出土した土器に型式差は認められなかった。

### その他

調査が行われたわけではないが、周囲の遺跡で採集された土器を1点図示した。加曾利B式の粗製土器であり、光町役場そばで採集されたとのことから、三反田遺跡のものと推定される。



写真33 弥平野遺跡出土の土器



写真7、写真34 三反田遺跡南出土の土器

## 小結

以上、芝崎遺跡、弥平野遺跡、三反田遺跡、中島遺跡の4遺跡を概観した。これらの遺跡は、全て九十九里平野に形成された砂堤列上に位置しており、遺跡の立地する砂堤列は3群に区分された砂堤群のうち、もっとも内陸側の第Ⅰ砂堤群にある。第Ⅰ砂堤群の形成時期は6,000年前以降とされているが、調査が行われた4遺跡からは縄文時代前期の土器が全く出土していないため、この時期にはまだ縄文人が低地を活動の場にしていなかったことがわかる。また、中島遺跡における低地部分での自然化学分析では、縄文時代中期後半には遺跡周囲で淡水化が進み、ヒシ属が生育するような「池沼的な環境」だったとする結果が示されている。芝崎遺跡や中島遺跡の出土遺物からは、縄文人が遺跡周辺の砂堤上で活動を開始したのは縄文時代中期と考えられるが、その頃にはすでに遺跡周囲が汽水域でなく、海浜から隔絶された「池沼的な環境」だったことは興味深い事実である。

いずれの遺跡でも遺構はほとんど存在しないものの、芝崎遺跡では曾谷式期の竪穴遺構を検出している。竪穴遺構内に炉跡や主柱穴は存在せず、掘り込みも不整形なことから、「簡単な小屋」（赤塚 1995）のような遺構と考えられる。類似した遺構は堀之内1式期のものが旭市坊ノ場遺跡（赤塚 1995）にも認められ、このような竪穴遺構を検出する低地の遺跡は「居住を目的とした場所」というよりも、漁労活動のため台地部から海岸へ移動する際の中継地点のような役割」（古内 2000）を持つ「一時的・季節的なキャンプ地」（西山 2003）と考えられていることから、芝崎遺跡も同様の機能を果たしていたものと思われる。中島遺跡出土の土器片鍾からも、後期には周辺の砂堤上が漁労活動を目的としたキャンプ地として機能していたことがうかがえる。

また、三反田遺跡と中島遺跡では称名寺式期及び堀之内式期と考えられる炉跡を検出している。両遺跡とも炉跡の検出面は標高4.5m～4.0mで、調査区の中でも標高の高い場所に構築される。炉跡が検出されたのは遺構密度が比較的希薄な場所であることから、ほかに複数基存在したとも考えられ、古代以降の遺構により壊されてしまった可能性もある。

検出されたのが炉跡のみの場合、竪穴遺構を必要としないほど極めて短期間の滞在だったのかもしれないが、近接した場所に同時期の竪穴状の遺構が存在する可能性もある。三反田遺跡では炉跡のほかに焚き火の痕跡と考えられる遺構を多數検出していることから、ただ暖をとるような役割だけではなかったとも考えられる。また、芝崎遺跡や中島遺跡では、調査区内でも標高の高い場所から出土する土器は縄文時代中期～後期前葉の阿玉台式から堀之内式にかけてのものが大半であり、標高の低い場所からは後期中葉から晩期の加曾利B式以降の土器が主体となって出土する。この出土分布傾向からは、水位の低下により後退する池沼の水際を縄文人が

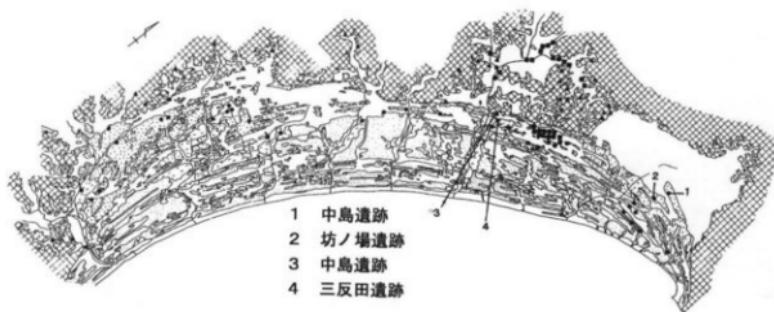


図8 九十九里平野の縄文遺跡分布（森脇 1979、西山 2000改変）

追いかけているかのような印象を受ける。これが陸化の進行により砂堤の面積が拡大したためならば、標高の高い場所にも後期中葉以降の土器群が出土するはずであるが、そのような状況は認められない。このため、水際に近い場所で何らかの作業を行っていたのではないだろうか。

これらのことから、砂堤上が「一時的なキャンプ地」としてだけではなく、何らかの生業活動の場として利用されていた可能性があり、それに伴う作業は水際に近い場所で行うものだったのかもしれない。

いずれにせよ、芝崎遺跡や中島遺跡、三反田遺跡で検出した竪穴遺構や炉跡のような遺構は、全て縄文時代後期からのものであり、中期にはみられなかったものである。これは後期になって、低地での生業活動がより活発かつ頻繁になったためと考えられるが、後期になって第Ⅱ砂堤群が形成され始め、海岸が急速に台地から遠ざかった（森脇 1997）ことも一因であろう。また、これらの砂堤上に縄文人が一回にどれだけの期間滞在していたのかわからないが、おそらく海岸近くでは一時的な滞在とはいえ、飲料水の確保が困難だったと推測される。そのため、淡水化の進んだ「池沼的な環境」である台地近くの砂堤上に「一時的・季節的なキャンプ地」を設営したのだろう。

（白崎）

#### 参考文献

- 赤塚弘美 1996 「千葉県旭市坊ノ場遺跡」（財）東総文化財センター
- 森脇 広 1997 「第1章第1節 沖積平野」「千葉県の自然誌 本編2 千葉県の大地 県史シリーズ41」  
（財）千葉県史料研究財団
- 古内 茂 2000 「大網白里町上貝塚」「千葉県の歴史－資料編 考古I」
- 道澤 明 2005 「芝崎遺跡I」（財）東総文化財センター
- 西山太郎 2003 「九十九里地域の低地遺跡再考」（（財）東総文化財センター設立10周年記念論集）

## 2. 弥生・古墳時代

### (1) 有角石器について

中島遺跡からは弥生時代の遺物と考えられる有角石器の破片が1点出土している。

中島遺跡から出土した有角石器の出土地点は、調査区の東部12F-20-22グリッドに位置し、中世以降と見られる52号土坑の外縁部分から出土している。地山の砂に斜めに刺さるような状態で発見された。52号土坑は砂州上の遺構群から外れた位置にあり、現況の田んぼよりも低い標高である。有角石器の出土状況は52号土坑に伴わない単独の出土といってよい。中島遺跡からは、この有角石器以外に弥生土器などの同時期の遺物が全く出土していないことや弥生時代の遺構についても全く検出されていないことから、このような出土のあり方は特殊な状況であると言えよう。後世に人為的に他の場所から持ち込まれ、捨てられた可能性も考えられる。

有角石器の遺存部分は刃部のみで、角部からやや刃部側に寄った位置で折れている。刃部の形態は、イチョウ形を呈する。刃部の一端が若干欠損しているほか先端に僅かな剥離が認められる。これらの剥離はともに古く、角部との間で折れる以前に既に存在した剥離であろうと考えられる。刃部幅は8.5cm、現存長は6.4cm、重量は139.6gである。石材は、閃緑岩として報告している。色調が全体的に白っぽく変色していることから熱を受けていると考えられる。被熱した時期については、欠損後なのかあるいはそれ以前のもののかは分からぬ。

現在千葉県内からは、28例ほどの有角石器が出土している。時期は、市原市草刈遺跡F区や同市御林跡遺跡、佐倉市大崎台遺跡、四街道市相ノ谷遺跡などの竪穴住居跡の出土例から弥生時代中期宮ノ台式中葉から後期久ヶ原式にかけての時期に属すると考えられる。

千葉県内の調査事例では副葬品と考えられる出土例はなく、竪穴住居跡から土器などの一般的な遺物と共に出土しており特殊な状況が看取された例はないといつてよい。特に副葬例がないことは、個人の死に際し私的所有物があるいはその権威を象徴するものとして副葬されるようなレベルの道具ではなかったことを示している。しかし、その一方で有角石器が武器形石器からの系譜によって発生した遺物と考えられることから、集落内で何らかの形で威信財としての機能を果たしていたことは間違いないと見られ、特定の個人の所有物に帰することなく集団による管理が行われ、集団の中でその機能を果たしていたのではないかと考えられる。

中島遺跡の周辺、千葉県北東部の出土例を図9に示した。旭市西足洗例、旧干渴町（現旭市）湯木出土例、多古町森ノ下遺跡例、同町栗山川上流出土例、小見川町良文貝塚例、大栄町堀窓出土例、成田市戸戸遺跡例、同市ダメキ第2遺跡例など8点の出土例がある。発掘調査による出土例には、戸戸遺跡例やダメキ第2遺跡例がある。時期が確かなのは弥生時代の後期前葉の竪穴住居跡から出土した戸戸遺跡例に限られ、他の6点の出土例は採集品のため時期は不明である。このうち旭市西足洗出土例は、学会に紹介された最初のものであり、刃部の中心軸線上に稜が作り出された特殊な例である。この稜は、左右からの単純な研磨による鏡ではなく、せり上がるよう作り出された特殊なものである。図示した8例のうち良文貝塚例を除いて、刃部の形態で中島遺跡例に類似しているのは、旧干渴町湯木出土例であろう。イチョウ形に開く刃部の形態は、千葉・茨城において一般的に見られるものだが、西足洗例のような刃部の先端が突出するものや緩い弧を描くもの、直線的なものなど刃部の形態は一様ではなく、大陸系磨製石斧などの定形的な石器群とは対照的であり、この刃部形態の曖昧さが逆に有角石器の特徴となっている。

石材については、茨城県資料も含め安山岩系が多く、閃緑岩としている例も多い。千葉県内資料に限って言えば、多古町森ノ下遺跡例の砂岩製を除いて、市原市域の有角石器などはほぼ同じ安山岩系の石材によって製作されており、旭市西足洗例や四街道市相ノ谷遺跡例、多古町出土例、また中島遺跡例も外見の観察の限りでだが、極めて類似した石材が選択されている。今のところ弥生時代の石器石材の産地について全く検討されて



写真35 中島遺跡出土の有角石器

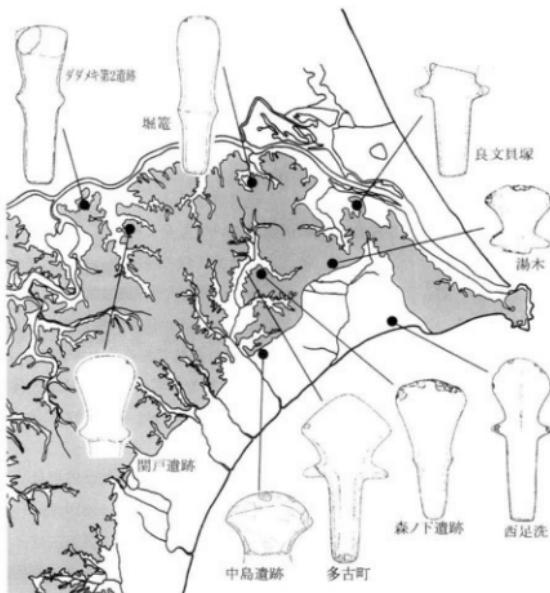


図9 千葉県北東部の有角石器出土例

いないため、どのように石材が搬入されたのか推測の域を出ないが、千葉・茨城両県からの出土例が最も多く、東京・埼玉・神奈川3県の出土例が少ない点から鬼怒川や渡良瀬川上流域などから石材が供給された可能性が高いと思われる。今のところ有角石器の製作遺跡は発見されておらず、形態的にも類似した個体が少ないと各集落で石材を入手しその都度個別に製作されていたのではないかと推測される。

千葉県北東部の弥生時代集落について見てみると、東京湾岸や印旛沼周辺において中期に環濠を伴う大規模な集落が出現する状況とは異なっており、後期に至ってもその規模は大きく拡大する傾向はないようである。小見川町阿玉台北遺跡や銚子市佐野原遺跡などの調査例においても中期末から後期前葉の北関東系の土器を伴う小規模な集落の存在が知られる程度である。最近の調査では、神崎町館山遺跡から後期の竪穴住居跡22軒が検出されており、後期にならなければある程度の規模の集落が見られないようである。また、光町神山谷遺跡からも中期から後期にかけての竪穴住居跡が検出されているが、東京湾岸などの中・後期の集落とは、その規模において大きな格差を伴っているようである。このような状況を踏まえると、東京湾岸などの地域において集落が拡大する中、集団をより強く統率していくための道具として有角石器の導入が図られたと考えるのは、やや無理があるのかもしれない。なぜなら、調査による出土例は少ないものの、千葉県北東部においても有角石器が地域的な偏りを伴わずに小規模な集落でも導入されにくくと見られるからである。集落の規模に関わらない有角石器の機能を考えなければならないのかもしれない。

(蜂屋)

#### 参考文献

- 蜂屋孝之（1996）「千葉県旭市足洗出土の有角石器について」『研究連絡誌』第46号（財）千葉県文化財センター  
岡本孝之（1999）「足洗型石器の研究」『考古学雑誌』第84巻第3号 日本考古学会

高花宏行（2004）「(2) 中期中葉から後期の遺跡」『千葉県の歴史 資料編考古4』

蜂屋孝之（2004）「(5) 特殊な遺物」『千葉県の歴史 資料編考古4』

#### （2）土器について

芝崎遺跡群からは弥生時代の遺物は、前述石器が1点出土したのに対し、土器は全く出土しなかった。これはその当時、生活環境としては全く不向きであったことが一番の要因として考えられよう。古墳時代になると芝崎遺跡、中島遺跡で遺物が見られるようになり、特に中島遺跡では土師器の壺・壺などが数十点出土し、生活を裏付ける遺物が出現する。しかし、同時代の遺構特に住居跡は検出されず、未調査区域に期待を抱かせる結果であった。

#### （3）玉について

古墳時代の玉である勾玉が、芝崎遺跡と中島遺跡とで1点ずつ出土した。どちらも欠損し、芝崎遺跡出土のものは瑪瑙製、中島遺跡出土のものは緑色細粒凝灰岩製である。また、この勾玉に関連して中島遺跡では、その原石と思われる緑色細粒凝灰岩の蝶が出土した。この石には自然縫面を半分以上残し、一面に打削痕があり、石器剥片を取る石核というより、玉原片を採取するための原蝶と思われる。また、他の一面に擦痕があり、後世砥石としても使われたかもしれない。ちなみに勾玉と原石とは同一個体ではない。



写真36 中島遺跡出土の古墳時代土器



写真37 芝崎遺跡群出土の玉類



写真38 中島遺跡出土の玉原石

### 3. 奈良・平安時代

#### (1) 集落と畠の変遷について

芝崎遺跡群では芝崎遺跡と中島遺跡から、奈良・平安時代の集落跡と畠跡が大規模に検出され、同時代の農村集落が形成されていたことが、発掘によって明らかとなった。その概要是、芝崎遺跡では総計210軒の住居跡、62棟の掘立柱建物跡、約4万m<sup>2</sup>の畠跡、中島遺跡では1軒の住居跡、22棟の掘立柱建物跡、約3,000m<sup>2</sup>の畠跡で、その数には差があるが、県内でこれだけの規模で畠跡が検出されたのは初めてである。この古代農村集落を出土遺物から分析すると、年代的には奈良時代初期から平安時代後期初頭までの、短くても約300年間は継続していたことが明らかとなった。そのため畠跡の多くは何度も掘り返されるため、畠溝が潰れたり格子状になり、また住居跡と重なって検出された。そのため遺構の先後関係は非常に複雑で、調査中でも遺構覆土がほとんど黒色であるところから、その堆積状態からは判別は困難であった。そこでそれぞれの遺構の年代判定はほとんどを出土遺物によったが、当然のごとく畠跡の多くは遺物が出土せず、これは周囲の遺構との関係から推定した。

以下、年代を追って、奈良・平安時代の農村集落の変遷を、図に示しながら追うことにする。

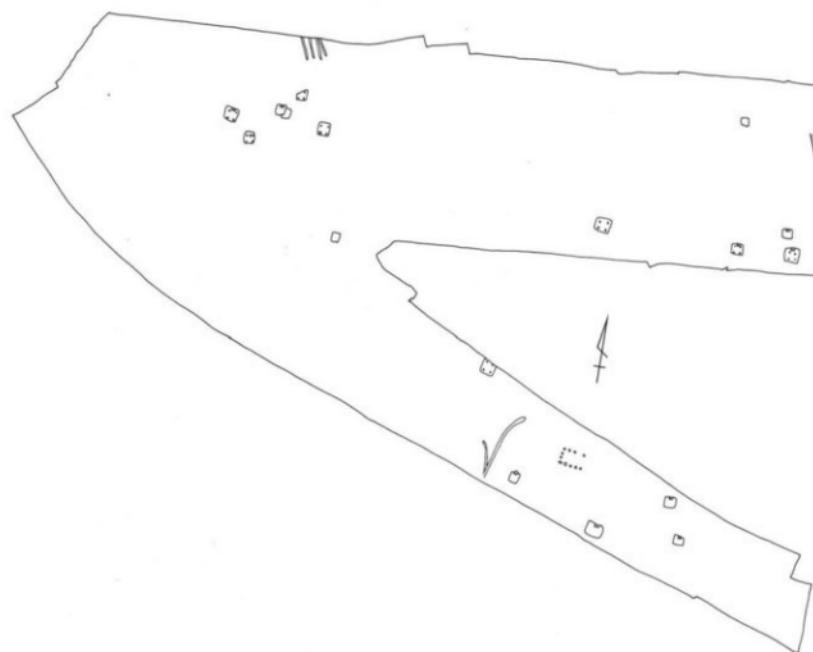
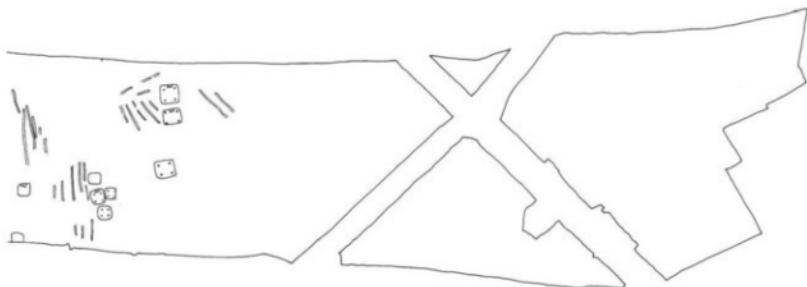


図10 芝崎遺跡奈良・平安時代

### 1期～2期（奈良時代前半期）

芝崎遺跡群で初めて軒を連ねるようになるのが、奈良時代の直前かまもなくに当たる8世紀頃であったと思われる。その初めの住居跡は調査区域中央部にある105・116号の比較的大形の住居跡で、その住人はこの遺跡の開拓者（パイオニア）であったと同時に、特に105号住居跡はこの村の中心的存在であったと考えられる。それはこの住居跡の占地が遺跡の中央というだけでなく、遺跡の最も高所であり、後にここに掘立柱建物跡群が林立する。つまり、ここは芝崎遺跡の中でも特別な所であったことが、集落発足当初より定まっていたことが考えられる。そのほか西部でも3軒の住居跡があるが、規模は中央部ほど大きくはない。この時期の畠は住居の周囲で耕す程度で、まだ本格的な畠地開墾は行われなかつたと思われる。2期の8世紀半ば近くになっても、集落の住戸数、畠跡の面積にあまり変化はなく、わずかに既存住居に隣接して新たに住居が増えたのみである。この時期、中島遺跡では明確な遺構は見られない。



1・2期（8世紀前半）の遺構分布

### 3期～4期（奈良時代後半期）

奈良時代後半期になると、芝崎遺跡では住居の数が増え、畑の面積も急激に広がる。特に中央部から西部の畑跡には区画溝が見られ、畑同士や住居域との境を構成していたと思われる。また区画溝の間隔もほぼ一定していることから、この時期になると計画的な畑の開墾が始まったことが推定される。区画溝の間隔は東西大体15mで、ほぼ南北方向に走り、規模は小さいが条里制を意識した地割をしたと考えられる。住居跡は中央部で多く分布し、規模は小から中規模になり、多くは2～3軒ずつまとまっていることから、前時期の大規模住居の大家族制から中小規模住居の核家族制へ移行した姿がうかがえる。また、この時期になると掘立柱建物跡が出現し、集落内における居住建物とは異なる新たな施設が出現したことは、農村集落においてその生活様式が次第に複雑になっていったのであろう。

中島遺跡でも4期には畑耕作を本格的に開始していたと思われ、畑跡およびその周辺から同期の土師器がある程度出土しているが、住居跡等の居住遺構は検出されていない。

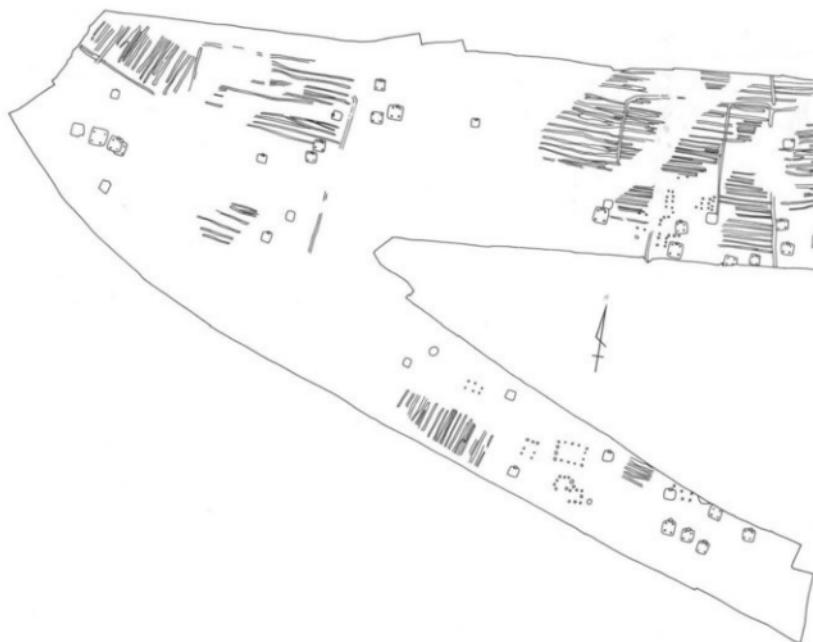
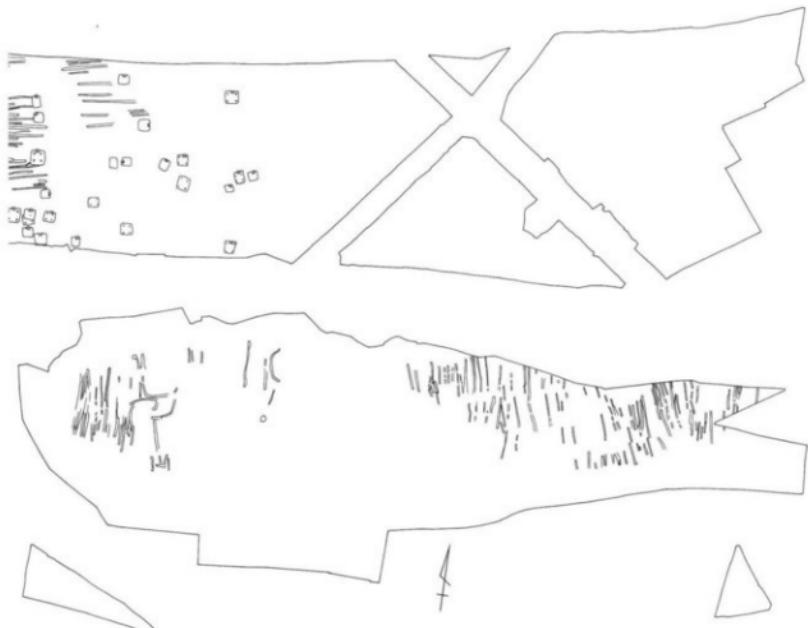


図11 芝崎・中島遺跡奈良・平安時代



写真39 芝崎遺跡中央部の住居跡群と烟跡



3・4期（8世紀後半）の遺構分布

### 5期（平安時代初期 9世紀前半）

芝崎遺跡では平安時代になると烟跡は遺跡全体に広がり、東端部から西部まで見られるようになる。その烟跡はひとつの区画が大きくなり、一辻が20mから大きい所では100m近いものまである。この時期では烟を区画する溝は、東部地域で3条見られるほかはなく、検出された畝溝の走向の違いで区画境を見極めることができる。それは区画が隣り合う煙の畝溝の走行が $90^{\circ}$ 異なり、あたかも煙が市松模様のように配列していることが明らかになった。そのような類例は大阪府池島・福万寺遺跡の平安時代条里区画の烟跡に見られ、芝崎遺跡でも条里制を意識して計画的に烟開墾が進められていったことが推定される。ただ図12に示した同期の抽出した烟跡は、後世の遺構によって寸断されているため、その様子は明確ではない。

住居跡は52軒を数え、芝崎遺跡奈良・平安時代9時期中最も多く、東部から西部まで遺跡全体に散在し、多くは前時期と同じように2~3軒ずつまとまって分布しているが、その一方で東西両端では単独であるものも見られる。また、住居跡は烟跡と接して分布しているものと、中央部最高所の掘立柱建物跡群の周辺に分布しているものがある。住居跡の方位は、ほぼ正方位を向いていて烟跡と一致し、竈は北壁中央に位置する。住居跡の規模は一辻2~3mの比較的小規模で、柱穴を有さない住居跡が多い傾向を示す。しかし、その中で遺跡中央部に分布する住居跡群(66・67・69・72号住居跡)は、一辻4.5~5.5mあって柱穴を有し、他に分布する住居跡とは1段階水準が高くなっている。またこれらの住居跡からの出土遺物も、他と比較して点数が多い。

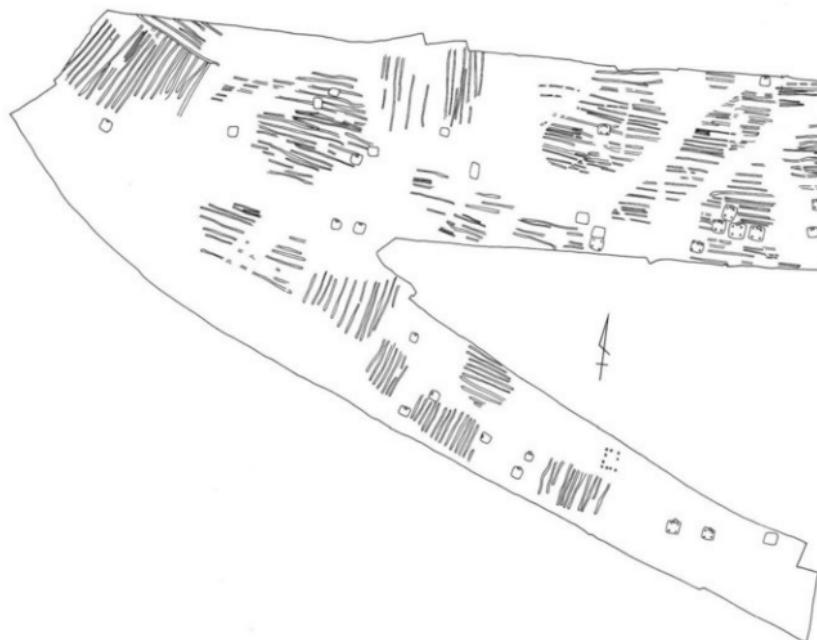
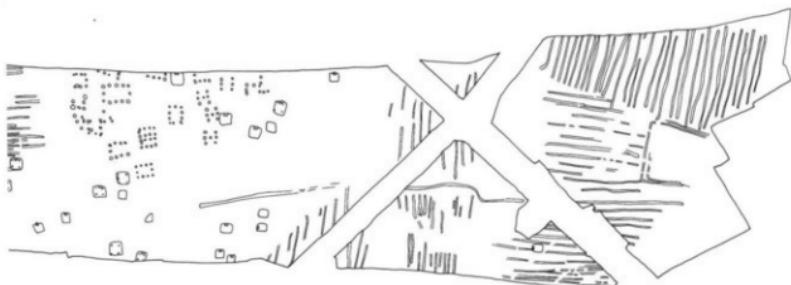


図12 芝崎遺跡奈良・平安時代

これらのことから、これら中央部に分布する住居跡群はこの時期の芝崎集落の中心であったことが推定される。その一方で掘立柱建物跡群はその東側の、遺跡最高所に移って立ち並び、集落とは異なる存在として浮かび上がる。

掘立柱建物跡群は遺跡中央部の最高所に立ち並んで18棟検出され、その中でも22号掘立柱建物跡は柱穴径1m、深さ1mを超える、桁行4間、梁行2間（8×5m）あって、掘立柱建物跡群の中で最も大きく、ほぼ中央部に位置するところから、建物跡群の中心建物跡であったと考えられる。この中心建物跡に代表されるようにこの時期の掘立柱建物跡は柱穴径が比較的大きく、それによって本時期の建物跡を抽出してみた。それによるとそのほかの建物跡は、柱間3×2間の脩柱式の建物跡と、柱間1×2間で柄柱を有する建物跡とがある。そしてこの前者建物跡は22号建物跡の周囲に、後者はその外側に分布するという傾向が見られる。前者建物跡は多くの遺跡で見られる普通の高床建物で、後者は柄柱を有することから重量物を収納する建物と考えられる。それから推定される掘立柱建物跡群の復元景観は、22号建物跡を主館として、その周りに付属館が立ち並び、またその外側に倉庫が点在していたことで、住居跡を中心とする集落とは異なる施設であった可能性が浮かぶ。

中島遺跡では、前時期に引き続き畠が広がっていたと思われる。



5期（9世紀前半）の遺構分布

#### 6期（平安時代前期 9世紀後半）

芝崎遺跡では9世紀後半も前半とあまり変化はなく、烟跡は遺跡全体に広がり、その歛走向もほとんど同じである。しかし、住居跡は多少変動が見られ、数にして34軒と少くなり、遺跡中央部の最高所の周辺も減少し、西部に分布の中心が移動している。掘立柱建物跡も11棟と少なくなる代わりに、中島遺跡で掘立柱建物跡が出現する。この掘立柱建物跡で見るよう、この時期住居跡が調査区域内で数が減ったのは、人口が減少したと捉えるのではなく、さらに集落が拡散、あるいは分村し、住居跡が調査区域外に広がったと考えられる。

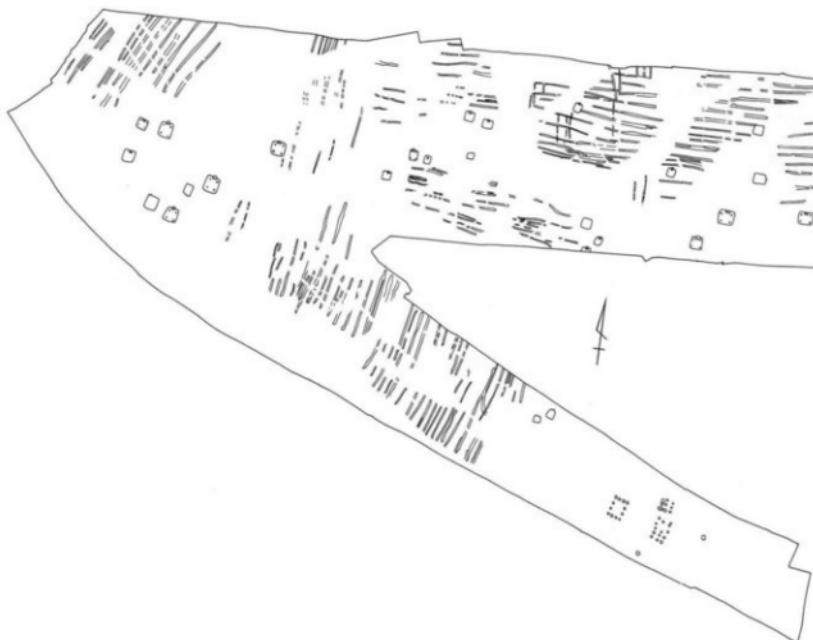


図13 芝崎・中島遺跡奈良・平安時代



写真40 芝崎遺跡中央部の掘立柱建物跡群



6期（9世紀後半）の遺構分布

## 7期（平安時代中期10世紀前半）

7期の10世紀前半になると芝崎遺跡では、畝跡は畝溝走行をこれまでとは $90^{\circ}$ 換えて耕され、土の更新を図ったり、区画の変更が見られたりする。調査区域内では住居跡は18軒とさらに少くなり、多くは西部に分布の中心を移し、遺跡中央部では5軒を残してほとんど見られなくなる。畝跡が東部にもまだ広く耕されているところから、調査区域外に住居跡がさらに拡散したと思われる。掘立柱建物跡は前時期に継続して中央部最高所に立ち並び、前に比して大形の建物跡が規則的に配列している。特に44号建物跡は柱間 $5 \times 2$ 間（ $15 \times 3.4m$ ）と南北に長く、他にあまり類例を見ない特殊な建物跡の可能性が考えられる。その東隣の51号跡（ $5 \times 3$ 間）、西隣の34号跡（ $4 \times 3$ 間）も44号跡と同じ方位で南北に長く、44号跡を間に対称的に並び、一連の建物が立ち並んでいたのかもしれない。

中島遺跡では遺跡西部に前時期に引き続き、掘立柱建物跡が10棟分布する。その建物跡群の中心に四面廂付建物跡（1号）が占地し、西側に南北に3棟、北側に東西に4棟、東側は後世の遺構で多くを消失しているが2棟確認できる。つまりこれらの建物跡はほぼ正方位に従って、1号跡を囲むようにコの字に配列していたことが連想される。このような建物跡の配列は、計画的かつ組織的に建てられたと言え、類例を探してみると官衙跡に多く見られる。また、これらの掘立柱建物跡の周辺からは、多くの縁釉陶器碗・皿・手付瓶の破片、灰釉陶器の碗・皿・長頸壺などのほか、獸足の三足壺も出土した。これらの出土遺物も、一般的な住居跡や集落跡からはあまり出土することはなく、県内ではこれまでに上総国府推定地の市原市稻荷台遺跡で最も多くの縁

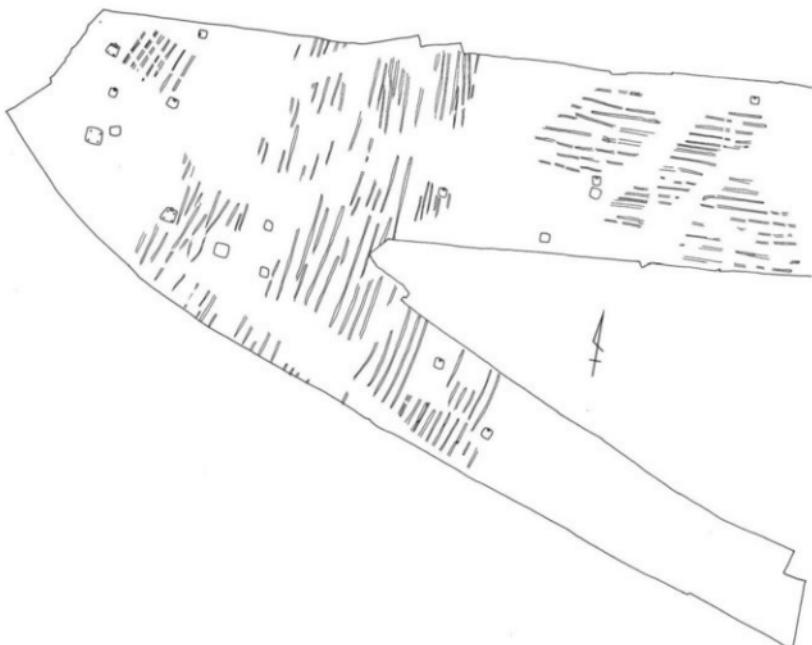


図14 芝崎・中島遺跡奈良・平安時代

釉陶器が出土していて、中島遺跡の例はこれに次ぐものである。また三足壺は県内の出土例はこれまでにない。もちろん、出土遺物からのみでは官衙跡と断定することはできないが、この時代の官衙跡自体これまでに良く分かっていないことから、このような姿での一例として可能性を考えてもいいのではないかと思われる。もう



写真41 中島遺跡 7期掘立柱建物跡群の復元模型



7期（10世紀前半）の遺構分布

一つ、この時期の建物跡群に付属して南側に井桁井戸枠を伴う井戸跡を検出し、底まで調査したが、木簡は出土せず、また墨書き器に見られる文字資料も多かったが、官衙跡に関連する文字のような直接的証拠は得られなかった。

#### 8期～9期（平安時代中期10世紀後半～後期11世紀前半）

8期の10世紀後半になると、芝崎遺跡では住居跡が10軒、掘立柱建物跡が1棟と、共に急速に少くなり、烟跡も面積が収縮している。特に遺跡中央部の最高所には、僅かに掘立柱建物跡と長方形の住居跡と烟跡、それに土坑2基あるのみになり、ほとんどが西部に移ってしまっている。また西部には、埋納状態で遺物が出土した墓壙と思われる土坑が、円形に配列して検出された。また中央部でもこれに似た土坑群が検出され、この時期は墓壙と思われる遺構が卓越していて、社会的な何らかの事象があったことを暗示させている。この時期の住居跡の減少は集落の分散というより、もはや人口の減少があったことは烟跡の縮小を見ても明白であろう。そうするとこの人口の減少と、この時期の何らかの事象とが、関係していたのか考えても異存は無いと思われ、その事象が西暦938年に起きた天慶・承平の乱（平将門・藤原純友の乱）と重なる可能性を検討したい。光町にはこの平将門を調伏するため、都から運ばれた不動明王を成田山に運ぶ途中、陸揚げした地としての伝承が残されている。

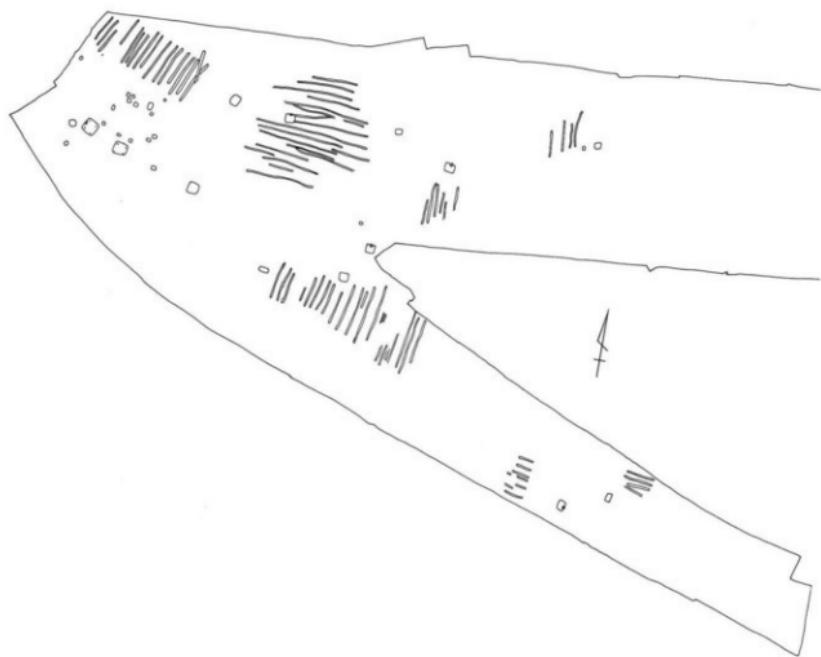
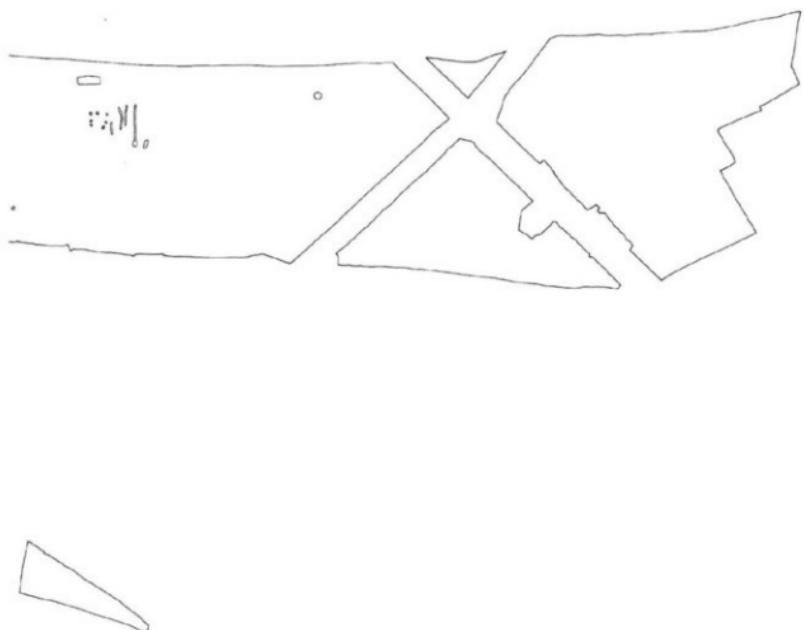


図15 芝崎遺跡奈良・平安時代

11世紀になると、芝崎遺跡ではいよいよ住居跡は4軒のみと少なくなり、集落としての維持は困難になっていった。



8・9期（10世紀後半～11世紀前半）の遺構分布

## (2) 番跡について

芝崎遺跡群では県内ではほとんど発掘されていない古代の番跡が検出され、これを調査区域内全体にわたって発掘した。特に芝崎遺跡では調査区域内のほぼ全域約4万m<sup>2</sup>にわたって番跡が検出され、それは地山の砂層まで掘り込んだ畝溝であった。この畝溝の数少ない出土遺物と覆土の状態から奈良・平安時代の所産であることが明らかになったが、多くの所で住居跡と重なり、まず発掘途中から住居跡との関係が大きな検討材料となつた。本遺跡で検出した無数の溝を、奈良・平安時代の番跡の畝溝とした根拠は、前述したように出土遺物がほとんどなかったところからはじめは見当が付かなかったが、調査を進めていくうちに溝に堆積する覆土の色と性質によって、次第につかむことができた。まず一見して分かる大きな差異は、覆土の色の違いである。芝崎遺跡では古い遺構の覆土ほど黒味が強く、これが栗山川に近くになると砂が増えて灰色で硬くなる。これが中世の鎌倉時代の遺構の覆土は、平安時代の土と色の見分けがあまり付かないが、室町時代になると少し茶色を帯び、江戸時代の溝の覆土は茶色で軟質になっている。その差を見る事ができたのが、平安時代の番跡を切って走る江戸時代の溝である。また平安時代と室町時代の番跡が交錯するところが写真46である。この遺構覆土の土色の違いから、無数の溝が奈良・平安時代のものと断定した。さらに同じ奈良・平安時代の住居跡や掘立柱建物跡などと番跡との前後関係では、近い時期では土色・土質では見分けが付かないところが多かったが、2時期（100年以上）隔てるとその差を識別することができ、写真48・57のように掘立柱建物跡の柱穴が番跡を切っている事を視認できた。

次にその溝を番跡の畝溝と判断した理由は、ひとつの群の溝が同じ長さではば等間隔で平行して走り、またその深さもほぼ一定している。その溝の底を見ると、細かい窪みが2条等間隔に並んでいる。これを丁寧に調査すると平面形が三日月形で、断面が三角形であることから、縦鋤で掘り起こした跡であることが推定できた



写真42 発掘前の番跡と区画溝



写真43 発掘した番跡と区画溝



写真44 発掘した番跡の見える鋤先痕



写真45 鋤先痕

(写真44・45・47)。烟跡の畝の間隔はほぼ1mで、これを群馬県埋蔵文化財事業団の能登氏に見ていただいたところ、米作の畑に間違いないだろうとの意見であった。また、烟跡の土壤の自然科学分析を委託した結果、イネ属のはかヒエ・アワの細胞珪酸体（プラントオバール）が検出され、これらが烟跡で作られていたことが推定された。また花粉化石は検出されなかつたため、その他の作物は不明であった。

この烟跡は芝崎遺跡では奈良時代から平安時代中ごろまで営まれたことが推定されるが、その住居跡と烟跡との関係は図10～15で示し、多くは住居跡と近接して畑を耕作していたことが想定され、両者が密接な関係にあり、まさに芝崎遺跡が古代の農村遺跡であることが明らかになった。その結果、烟跡は奈良時代はじめには造られ、その後半期には畑を区画する溝が作られ、整然とした畑の造成が始まり（写真42・43）、平安時代はじめには遺跡全体に拡大していたことが推定される。その烟跡の畝の走行はほぼ東西南北に一致した正方位を示し、畝が同じ方向で走る一群を一つの区画として捕らえると、一区画が1辺20～100mあって、条里を意識したような区画で、また、隣り合う区画の畝の走行が90°異なり、これらの畑が計画的に耕作されていたことが想定される。奈良時代から平安時代はじめにこのような大規模な畑が開発された背景には、当時国家レベルでの食料増産政策（良田百万町歩造成－養老6年、整田永年私財法－天平15年等）があったと考えられ、その根底に急激な人口の増加や東国（関東）への開発があったことが指摘されよう。



写真46 交錯する平安時代と室町時代の烟跡



写真47 平安時代の畠溝に入る白色土



写真48 発掘前の掘立柱建物跡と烟跡  
(烟跡は奈良、掘立柱建物跡は平安)



写真49 住居跡の床面を掘っている烟跡

### (3) 住居跡について

芝崎遺跡では調査区域ほぼ全体から奈良・平安時代の烟跡と共に、同時代の住居跡が合計で210軒検出した。その住居跡のほとんどは地面を方形に掘り下げて床面とした竪穴住居跡で、北側の壁中央に竈を有するこの時代のものとしては一般的な形態であった。住居跡の方位は多くが正方位を向き、西部で少し東に傾き、その傾向は烟跡と同様であった。住居跡の規模は一辺2m前後的小規模なものから、一辺5mほどの比較的の規模が大きなものまであり、その変化の傾向としては1・2期では規模が大きく、3・4期になると一回り小さくなり、5期以降になると中規模住居跡が群の中心にあって、その周りに小規模住居跡が取り付くような分布になる。

写真50・51の105号住居跡は芝崎遺跡でも最も古い住居跡と思われ、規模が最も大きく、数度の立替をしていることが、床面の重なりと柱穴から確認された。この芝崎の開拓者の長の住居であったかもしれない。この住居跡の床面を除去して掘り方を見ると、烟跡の掘り方とよく似た鋤先痕が等間隔に並んで検出された。

写真52は、2期の住居跡であるが、竈がなく床面中央に炉跡がある。このように竈ではなく炉を有する住居跡は、時期を異にするけれども数軒ある。また写真49は床面より浮いたように高い位置に炉跡を有する住居跡である。このような浮いた炉を有する住居跡はこのほかに3軒あり、いずれも炉の住居跡内の位置は隣に近い所にあり、そのあり方に共通性が見られるが、竈の有無、時期などは一定しない。

写真53は遺物が使用当時の位置を保った状態で出土した住居跡である。しかし遺物のほとんどは破損し、覆土および竈は泥を被ったような粘質黒色土が堆積していた。おそらくこれは洪水災害にあったためと推定され、低地の川に近い遺跡の宿命を示す例と言えよう。



写真50 1期の住居跡 (105号)



写真51 105号住居跡の掘り方



写真52 炉跡を有する住居跡 (20号)



写真53 洪水災害にあったらしい住居跡  
(37・38号)

#### (4) 挖立柱建物跡について

芝崎遺跡、中島遺跡の2遺跡で奈良・平安時代の掘立柱建物跡が多数検出され、それも両遺跡ともある箇所に集中して分布していたことから、集落に伴う建物跡というより、集落から独立した施設であったことを想定された。芝崎遺跡では調査区域中央部の遺跡最高所に建物跡が集中し、小さい規模のものでは1×2間から、規模が大きいもので3×5間、また柱穴が径1mを超える建物跡もあり、また廟を有する建物跡もある。そしてこの建物跡の中にこれに付属すると考えられる竈が1基検出され（写真55）、そこから縁軸陶器碗が出土した。ここに建物跡が集中するのは5期から7期で、芝崎では平安時代前期の最も繁栄した時期である。

中島遺跡では遺跡西部にかたまって掘立柱建物跡が検出され、特にその中央に四面廟付建物跡があり、その周りをコの字状に建物跡が並んでいたのが確認された。その建物跡の中には、芝崎遺跡東部で検出した白色土が柱穴から確認され（写真57）、発掘の結果、かなり硬く踏み固められていたところから、柱の根固めのために白色土を入れたことが推定された。この中島遺跡では建物跡が22棟検出されたにもかかわらず、住居跡は異なる時期の1軒があったのみで、掘立柱建物跡が存在した時期には住居跡が1軒もなかったことになる。また、その建物跡の周辺から多数の縁軸陶器や灰釉陶器の破片が出土している。そのようなことからこの中島遺跡の建物跡は、特別な施設であったと考えられる。ここが下総国と上総国との境に当たり、東総の玄関口に当たるところである。そのような所に公的な施設一官衙があってもおかしくないと思われるが、決定的な証拠となる遺物が出土しなかったため、断定は難しい。



写真54 調査中の掘立柱建物跡



写真55 芝崎24号掘立柱建物跡の竈跡



写真56 中島遺跡の掘立柱建物跡群



写真57 中島遺跡の掘立柱建物跡検出状態

### (3) 奈良・平安時代の土器

#### 1.はじめに

芝崎遺跡からは、奈良・平安時代の遺構として、竪穴住居跡210軒、掘立柱建物跡73棟、土坑83基、溝が多数検出された。特に、竪穴住居跡からは土器が比較的まとまって出土しており、当該期の土器の様相を把握する上で良好な資料といえる。

器種及び器形としては、土師器の壺・塊・盤・皿・甕・瓶・鉢、須恵器の壺・甕・長頸壺などが認められ、また僅かながらではあるが、縁軸・灰釉陶器も出土している。主体となっているのは、土師器の壺と甕である。須恵器では甕の出土が中心であるが、いずれも破片資料で、その多くが転用硯や砥石として再利用されている。産地としては在地産および湖西産を中心とした東海地方のものがそのほとんどを占め、その他に、新治産などの常陸地方のものが認められた。

ここでは、形態の変化が最も観察しやすい土師器の壺を中心に、本遺跡での土器の様相を見てみたいと思う。資料は竪穴住居跡出土のものを一括資料として扱い、適宜、土坑出土資料などで補足していくものとする。なお、以下の記載において、器種については特に断りがない場合は、土師器を指すものとする。

#### 2. 土器の様相

##### I期

器形の組み合わせは、非ロクロ整形の壺・盤が主体である。ロクロ整形のものは認められない。壺・盤の形態から、2期に細分が可能である。

##### I a期 (図16)

壺は、扁平気味の丸底タイプ（1～3・5・7・11・12）が主体である。いずれも口径が16.0cm前後と大型で、器高が3.0～4.0cmと低い。体部はやや丸味を帯びて底部から緩やかに立ち上がり、そのまま口縁部に至る。内外面に赤彩が施されているもの（5・7）もある。なお12は、口縁部と体部との境に僅かながら稜が認められ、口唇部がやや外反する。少し古い様相といえる。そのほかに、口径値は14.6cmと小振りだが身の深いタイプ（4）がみられる。

盤も大型で、口径が20.0cmを越える。内面のミガキは口唇部近くにまで丁寧に施されている。口縁端部を内側に若干巻き込んでいるもの（6）、内外面に赤彩が施されているもの（8）がある。

甕は、口縁部が素縁のタイプ（9）が主体と考えられる。その他には、口縁端部を内側に若干折り曲げるタイプ（10）や短くつまみ出すタイプ（13）、そして胴部外面の上半にタタキ、下半に縦位のミガキが施されたいわゆる常総型甕（14）もみられる。

##### I b期 (図17)

壺は引き続き扁平気味の丸底タイプが主体であるが、法量に変化がみられる。すなわち、口径が16.0cm前後（4・19）、15.0～14.0cm（1～3・7～9・14～18・21）、14.0cm以下（5・6・12・13）と、大・中・小型のものが出現するのがこの時期である。形態にも若干の変化が現れ、体部から口縁部にかけての器厚が厚くなるもの（1・7・8・17・18）、口縁端部を内側に若干巻き込むもの（1・12・16）がみられるようになる。なお、15・19・21は内外面に赤彩が、14は内面に、8・12・13は内外面に黒色処理が施されている。

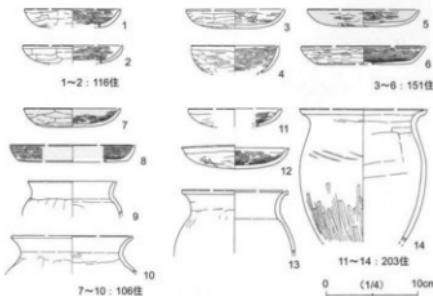


図16 Ia期の土器様相

盤も法量に変化が認められる。口径が16.0cm前後(22)と14.0cm以下(20)と、Ia期に比べ、中・小型のものが出現する。どちらも内外面には赤彩が施されている。

塊(23)は、丸味を帯びた平底から直線気味に立ち上がり、口縁部が若干外反する。体部外面はヘラケズりで、一部口唇部に至る。

壺に関しては、ほとんど変化はみられない。

なお、10は小型の高壺である。より古くなる可能性もあるが、192号住から小型の非クロコロの盤とともに同様の高壺が出土しており、ここでは一応、本期に属するものとしておく。



図17 I b期の土器様相

## II期 (図18)

内外面に赤彩を施したロクロ整形による盤状を呈した壺、いわゆる盤状壺の出現をメルクマールとする。

非クロコロ整形の壺は、I期に比べ底部の平底化がすすむ。大きさでは、口径が15.0~14.0cmの中型タイプ(4・5・9)と14.0cm以下の小型タイプ(1・3・7・8)はみられるが、16.0cmを測るような大型のものがみられなくなる。また11のように、身が深く塊に近いタイプもみられる。

盤状壺(2・6・10・13)は、平底の底部から体部は直線的に外に開き、そのまま口縁部に至る。いずれも、体部下端は未調整で、口径は15.0cm以下、器高は3.5~3.0cm前後と低く、小型タイプといえる。底部調整は、6が静止糸切りの後周縁を回転ヘラケズリ、2・13は全面手持ちヘラケズリ、10は回転ヘラケズリである。

壺は、口縁部の形態にそれほど変化は認められないが、口縁端部を若干内側に折り曲げるタイプ(12)や短くつまみ出すタイプがやや増える傾向がみられる。なおI期に引き続き、常総型壺(17)も認められる。

## III期

ロクロ整形による箱形を呈する壺が出現する。

この箱形ロクロ壺の形態および調整技法から2期に細分が可能である。

## IIIa期 (図19)

非クロコロ整形の壺は、それまでの扁平気味の丸底タイプ(1~3・5~6・12)から、丸味を帯びた平底タイプ(11・19・20・25・30)のものが主体となる。どちらも口径は14.0cm以下と小型であるが、器高は4.0cm前後を測り、それまでに比べて若干高くなる。なお20は内外面に、30は内面に黒色処理が施されている。

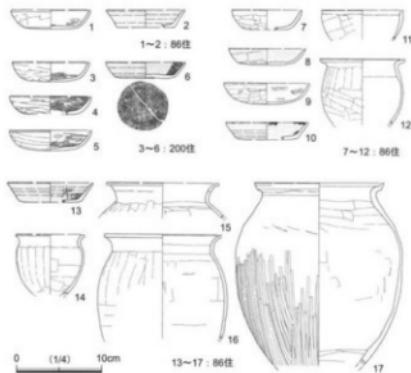


図18 II期の土器様相

箱形ロクロ坏（7・9・13～17・21）は、口径が12.5～11.0cm、器高が4.5～4.0cm、底径が8.0～7.0cmを測るものが中心で、器厚が底部は厚く、体部から口縁部にかけては薄いのが特徴である。底部は若干丸味を帯びた平底で、体部はやや外に開き気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。体部下端に腰をもつもの（15・16・21）や、逆台形にプロポーションが近いもの（8・6・14・21）もみられる。調整は、体部下端が回転ヘラケズリか未調整、底部は静止糸切り後回転ヘラケズリ（8・17・21）もしくは全面回転ヘラケズリ（9）か手持ちヘラケズリ（7・14～16）である。なお9・16は内面に黒色処理が施されている。

非ロクロ整形の塊（31）は、口径15.8cm・底径11.0cm・器高5.7cmと大型である。器高体部外面をヘラケズリ後、口縁部をナデ調整、内面はミガキが施されている。

盤状坏（23・27）は、二期と比較した場合、口径値に大きな変化はみられないが、器高が4.0～3.5cmと高くなる。調整は、23・27が全面手持ちヘラケズリである。

壺は、口縁端部を上方へつまみ上げるタイプ（29・34）が主体となるが、素縁のタイプ（10・18・28・32・33）や口縁端部を短く内側に折り曲げるタイプなども引き続きみられる。

### Ⅲ b期（図20）

非ロクロ整形の坏は、引き続き丸味を帯びた平底タイプ（2・3・5・12）が主体で、形態・技法的な変化はほとんど認められない。内面が黒色処理のもの（12）も引き続き認められる。

箱形ロクロ坏（4・6・8～11・15～17）は、口径・器高値に変化はみられないが、底径が8.0cm以上と大きく平らになり、プロポーションがより長方形に近づく。底部の器厚は薄く、また体部下端の調整に手持ちヘラケズリ（4・10・11・16）が加わる。その他に、底部の切り離しに回転糸切り技法（4・10）が出現するのも当期の大きな特徴で、4は糸切り後手持ちヘラケズリ、10は糸切り後周縁に手持ちヘラケズリが施される。なお16の底部切り離しは特徴的で、中心糸切り技法である。周縁は手持ちヘラケズリで、内面に黒色処理が施されている。

ロクロ整形の塊（7）には、体部内外の口唇部に至るまで丁寧なミガキ、底部は手持ちヘラケズリの後ミガキ、内面は黒色処理が施されている。

壺は、口縁端部をシャープにつまみ出す、もしくはつまみ上げるタイプ（19）がみられるようになる。

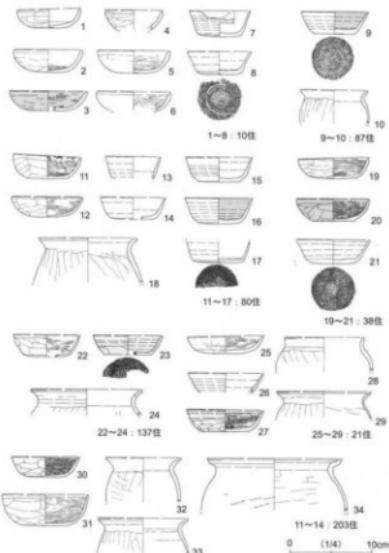


図19 Ⅲa期の土器様相

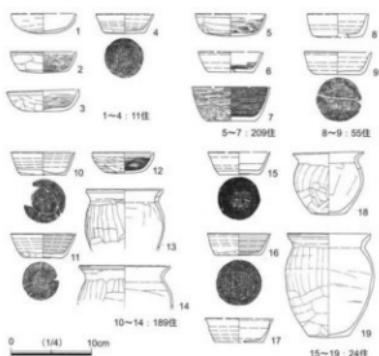


図20 Ⅲb期の土器様相

#### IV期（図21）

ロクロ整形による高台付坏と盤の出現をメルクマールとする。ただし両者とも存続期間は短く、本期をもってみられなくなる。また、底部切り離し技法は、静止糸切りと回転糸切りとが並行している。

非ロクロ整形の坏には、身が深く底部が丸底気味の、碗に近いタイプ（12・21）がみられる。口径は15.5cm前後、器高は5.5～4.5cm前後を測る。これは、Ⅲa期の大型碗が小型化したものと考えられ、内面が黒色処理されているものもある。平底タイプの坏は、それまでの丸味を帯びたもの他に、完全に平底化したもの（2・4・8・11・25・28）も出現する。断面形態にも変化がみられ、2・8・25は体部から口縁部にかけての器厚が厚くなり始める。また、28は内面に黒色処理が施されている。なお、従来の丸底タイプの坏（10）も僅かにみられる。

ロクロ整形の坏は、箱形タイプの他に、逆台形タイプのもの（15・19・20）が加わる。20は体部下端が手持ちヘラケズリで底部は回転糸切り後周縁を持ちヘラケズリ、内面に黒色処理が施されている。箱形タイプには、底部を回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ（16）、静止糸切り後周縁手持ちヘラケズリ（17）、回転糸切り後手持ちヘラケズリ（24）したものがみられる。内面黒色処理は認められない。

高台付坏は、底径が11.0cm前後（9）・9.0～8.5cm（7・31）・8.0～7.0cm（5・14・18）と、大・中・小型のタイプに分けられる。大・中型タイプは、体部が外に開き気味に立ち上がる。7は口縁部が若干外反し、底部は静止糸切りである。9・31は底部が回転ヘラケズリである。

小型タイプは、体部が外に開き気味に立ち上がるもの（14）と、垂直に立ち上がり箱形を呈するもの（5）とがみられる。底部調整についてはいずれも不明瞭である。なお、大型タイプ（9）が時期的にはやや先行する可能性が高い。

26・27は盤状坏がより大型化した坏である。口径は16.0～15.5cm、底径は10.5～10.0cm前後、器高は5.5cm前後を測る。調整は、体部下端が手持ちヘラケズリ、底部が全面手持ちヘラケズリである。また、図示していないが、静止糸切り後周縁手持ちヘラケズリのものもみられる。なお、27は内外面赤彩が施されている。

ロクロ整形の盤（13・22）は、口縁部が垂直気味に体部から立ち上がり、体部下端に回転ヘラケズリが施されている。13は平底で底部調整は回転ヘラケズリである。22は内外面に赤彩が施されている。

本期から、壺は口縁部の形態がバラエティーに富み、特徴を抽出することが難しくなる。図示したのは、口縁端部を短くつまみ上げるもの（32）と、口唇部を上方に屈曲させるもの（33・34）である。

#### V期（図22）

ロクロ整形の坏が、箱形タイプに替わり逆台形タイプが主体となる。また逆台形を呈するロクロ整形の大型碗が出現するのも本期の特徴である。

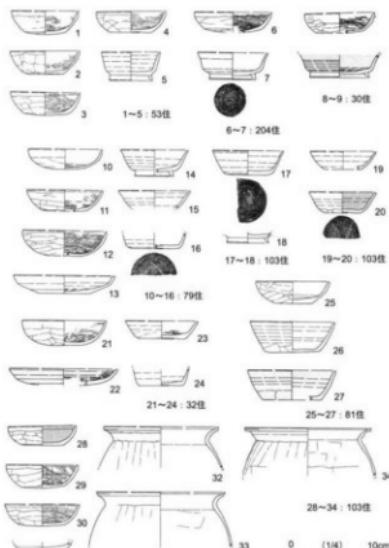


図21 IV期の土器様相

非クロロ整形の坏は、扁平気味の丸底タイプは全くみられなくなる。平底タイプは、IV期と同様、丸味を帯びたもの（1～3・16）とそうでないもの（5・9）とがみられる。器高は4.0cm前後と、あまり変化はみられないが、口径が12.0～11.0cm前後、底径が7.5～6.0cmと若干小型化する。

逆台形ロクロ坏は、器高が4.0cm前後と少し高いものの（4・14・15・17・18・20）も認められるが、形態的変化はほとんどないといってよい。底部切り離し技法は、静止糸切りがみられなくなり、ほぼ回転糸切りだけとなる。なお、20は口縁部が欠損しているため、正確な形態・法量は不明であるが、やや大型のタイプである可能性がある。

ロクロ整形の大型碗（坏）（6）は、内面にミガキと黒色処理が施されているのが特徴である。口縁部は欠損しているが逆台形を呈すると考えられる。体部下端は手持ちヘラケズリ、底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリである。

壺は、引き続き口縁部の形態がバラエティーに富む。7は口唇部をやや外側に、8・12はやや外へつまみ出す。21は口縁端部を内側に若干折り曲げる。なお、常総型壺（22）は本期までみられる。

#### V期

高台付皿の出現をメルクマールとする。本期は、高台付皿と逆台形のロクロ坏の形態から3期に分けることができる。また、非クロロ整形の坏が本期を最後に消元する。

#### Va期（図23）

非クロロ整形の坏（1～3・6・7・12・13・24・28）は、底径が口径のおよそ1/2になり、器高が5.0～4.0cmと高くなる。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。底部の器厚は薄いが体部は厚く、口縁部ではさらに厚さを増す。調整は、体部外面がヘラケズリ、内面はナデが主であるがミガキを施しているものもある。底部はいずれも手持ちヘラケズリで、一方向のものが主体である。

逆台形ロクロ坏は、形態にバラエティーが認められ、また、体部下端の調整は回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリ・未調整が混在している。17・25・29は底径が口径の1/2以下で体部が直線的に外へ大きく開くタイプで、中でも29は口径が15.0cmを越える大振りなものである。

ロクロ整形の大型碗（23・26）は逆台形を呈する。底部は平底で、外へ直線気味に開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。体部下端は未調整、内面は丁寧なミガキの後、黒色処理が施されている。23の底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリ、26は全面手持ちヘラケズリである。

高台付皿（5・8・14）は、体部が直線気味に伸びて口縁部がやや外反する。断面の器厚をみた場合、口縁部がやや厚くなる。8・14は内面黒色処理である。なお、19は角高台状を呈しており、黒笠14号窯式の灰釉陶器の皿を寫したものと考えられる。

壺は、全体的に薄手の作りとなる。口縁部形態は引き続きバラエティーに富む。27は素縁の口縁を持つ小型壺、30は口唇部を強く外につまみ出すタイプ、31は口唇部を垂直に屈曲させるタイプ、32は口唇部をつまみ上げるタイプである。

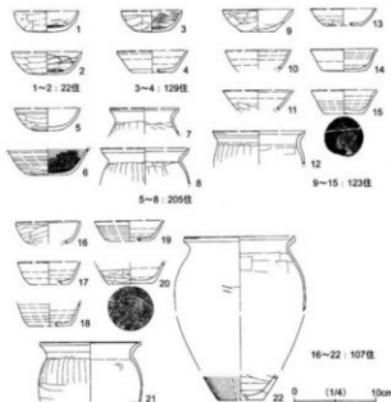


図22 V期の土器様相

### Vb期 (図24)

非クロ整形の壺 (1~3・15) は、器高がやや高くなり、5.0cm前後を測るものが主体となる。調整に関しては、1~3の内面がヘラナデである以外は特に変わりはない。

逆台形ロクロ壺は、体部下端にくびれをもつタイプ (12・16) や口縁部が少し外反するタイプ (8) がみられるようになる。底部は回転糸切り後未調整のタイプ (10・12・16~24・27) が主体となる。そのほかの底部調整は、6が回転ヘラケズリ、7~9・26は手持ちヘラケズリである。なお、5は形態的に時期がずれる可能性が高い。

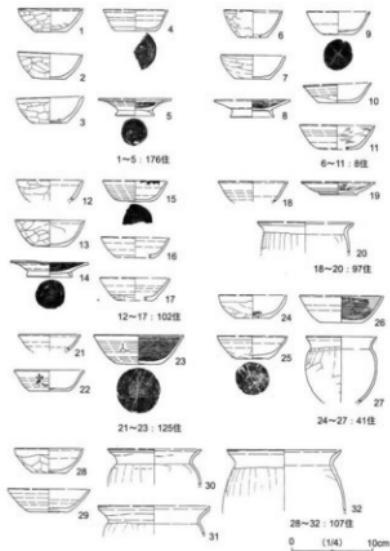


図23 Vla期の土器様相

クロ整形の大型壺 (28) は、Vla期と比べ、口縁部がやや外反する。体部下端は手持ちヘラケズリ、内面はミガキの後、黒色処理が施されている。底部は回転糸切りの後手持ちヘラケズリである。

高台付皿 (4・11・13) は若干のバラエティーが認められる。4は全体的に厚手の作りで、口径と底径が他と比べて一回り小さい。11は体部から口縁部にかけて直線気味に伸びる。また、口縁部の器厚は薄い。なお、3点とも内面は黒色処理である。

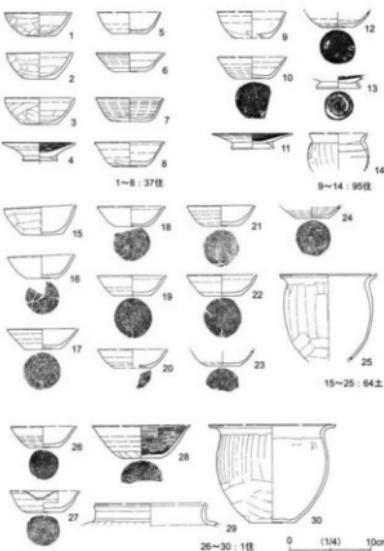
壺は、引き続き薄手の作りである。14は素縁の小型壺、25は口縁部が緩やかに屈曲し口唇部をつまみ上げる。29は頸部から口縁部にかけて垂直に立ち上がり、口唇部を短くさらにつまみ上げる。30は口縁部を強く外へ屈曲させた後口唇部を垂直気味に折り曲げる。

### Vc期 (図25)

非クロ整形の壺はほとんどみられなくなる。6はVb期のものと同じプロポーションだが、1は底径が口径の1/2より大きく器高もやや低い。

逆台形ロクロ壺は、底径が口径の1/2以下で、底部は回転糸切り後未調整のものが主体となる。体部下端の

図24 Vb期の土器様相



調整については、引き続き三つの技法が混在している。4・5・14・15は体部下端にくびれを持ち、さらに5・15は体部が丸味を帯びながら外へ開いて口縁部が外反する。同様に口縁部が外反するタイプとしては7・8・16・17が挙げられる。また、14・18・19は口縁部の器厚が増すタイプである。なお、図示していないが、内外面に黒色処理を施したものもみられる。

ロクロ整形の大型壺（20）は、体部上半が欠損しているため正確な形態は不明であるが、平底の底部からやや丸味を帯びて立ち上がる。体部下端は手持ちヘラケズリ、底部は回転糸切り後周縁手持ちヘラケズリである。

皿（9）は無台である。平底の底部から体部は直線的に開き、口縁部で僅かに外反する。体部下端および底部全面手持ちヘラケズリである。

甕は、頭部がくの字状に強く屈曲するタイプ（11・21）がみられる。

#### VII期（図26・27）

逆台形ロクロ壺は、引き続き底径が口径の1/2以下のものが大多数であるが、1/2以上のものもみられる。調整に関しては、体部下端は未調整、底部は回転糸切り後未調整である。ただし、技法の逆転現象が起こっており、図26-6の底部は静止糸切り後未調整である。こうしてみた場合、1～3は体部下端に手持ちヘラケズリが施されており、やや古い様相といえる。図26-6・21・22、図27-5・11・12は体部が内湾して立ち上がる。

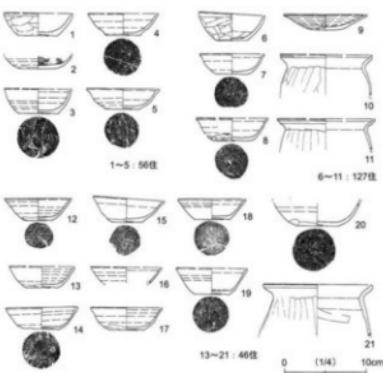


図25 VIIc期の土器様相

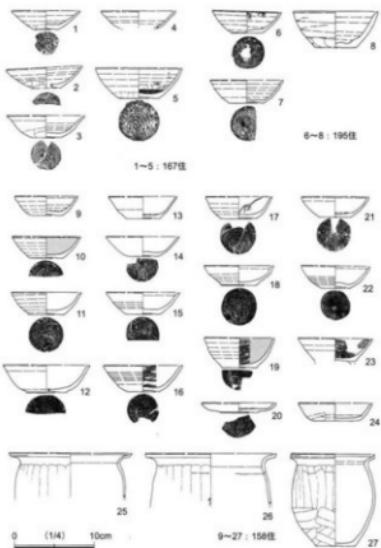


図26 VII期の土器様相（1）

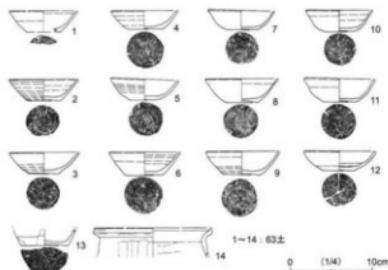


図27 VII期の土器様相（2）

本期を特徴づけるタイプの一つといえる。図26-10は内面黒色処理である。壺の内面への黒色処理は、本期まで認められる。

ロクロ整形の大型壺（図26-5・8）は、内面のミガキが省略される傾向にあり、黒色処理も施されていない。体部下端は手持ちヘラケズリで、5の底部は回転糸切り後未調整、8は手持ちヘラケズリである。特に8は全体的に厚手の作りで重量感があり、鉢に近いタイプといえる。

図27-13はロクロ整形による小型壺と考えられる。底部は静止糸切りで周縁の一部に手持ちヘラケズリが施されている。

ここで問題となるのは、皿（20）である。回転糸切りの平底から、体部は外に開いた後丸味を帯びて立ち上がる。体部下端にはくびれを持つ。本遺跡では唯一の出土事例である。形態的に、VI期の高台付皿につながらないことはもちろんのこと、小皿の祖形として捉えるのにも違和感を感じる。周辺の遺跡では、神山谷遺跡から同じく1点だけ、S I-77から出土している。

管見に触れた限りでは、出土する場合は1遺跡から1点だけということが多く、形態的変化が追えない。その存在に、非常に唐突な感が強い。今後の検討課題である。

なお、24は盤状壺で、本期には属さない。混入と思われる。

#### VII期（図28）

高台付壺の出現をメルクマールとする。

逆台形ロクロ壺は、引き続き口縁部が外反するタイプ（1）や体部が内湾するタイプ（2）がみられる。底部は回転糸切り後未調整である。

高台付壺では、足高高台タイプのものがみられる。8~13がそれに該当すると思われる。特徴としては、壺部に腰を持ち、口縁部が強く外反する。8・10・11は内面にミガキが施されており、さらに10・11は内面黒色処理である。

高台付きの小型壺（4）が出現するのも本期の特徴である。体部に腰を持ち、口縁部が外反する。

高台部は欠損しており、その形は不明である。時期的には足高高台タイプの壺に先行するものと考えられる。

壺に関しては、良好な資料があまりみられない。15は口縁部が手捏ね仕上げのもので、やや特殊なタイプといえる。

なお、14は大型の逆台形ロクロ壺であるが、本期とは時期的にずれる可能性が高い。

#### 3. 各期の実年代について

本遺跡および近接する中島遺跡からは実年代を直接示す資料は出土していない。また、年代を推定する上で目安となる灰釉陶器・畿内産土師器や帶金具なども、遺構外もしくは遺構内であっても他の土器との共伴関係を捉えにくい出土状況なので、指標とは成り得ない。そこで今回は、県内から出土の紀年銘墨書き土器や、従来の編年研究を参考に、実年代について検討を加えることとした。

県内から出土の紀年銘墨書き土器は以下の6例である。

- ①上谷Ⅱ遺跡（八千代市）A116号住・・・・箱形ロクロ壺 - 「延暦十年」(791年)

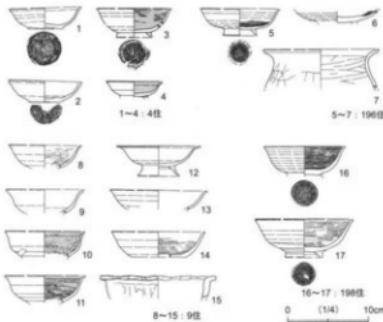


図28 VII期の土器様相

- ②鳴神山遺跡（印西市） II 004号住・・・逆台形ロクロ坏-「弘仁九年」（818年）  
 ③上谷遺跡（八千代市） A 036号住・・・逆台形ロクロ坏-「承和二年」（835年）  
 ④北海道遺跡（八千代市） D 048号住・・・逆台形ロクロ坏-「承和五年」（838年）  
 ⑤吉原三王遺跡（佐原市） 023号住・・・逆台形ロクロ坏-「承和」（834～848年）  
 ⑥稻荷台遺跡（市原市） 37号住・・・ロクロ皿 - 「貞觀十七年」（875年）

上記の事例の中で、最も基点となるのが⑥稻荷台遺跡である。住居覆土の焼土層から紀年銘墨書き土器が出土しており、他の土器との共伴関係がつかみやすいこと、さらに焼土層出土の土器群とその下層から出土の土器群との比較ができ、9世紀の土器様相をみる上で格好の資料といえる。なお、①～⑤に関しては、墨書き土器そのものの形態および共伴している土器の様相を参考とした。

以上を踏まえた上で、各期の実年代について、次のように推定した。

#### I期

- a期・・・7世紀末～8世紀初頭  
 (当該期の遺構) 106・116・151・203号住  
 b期・・・8世紀前葉  
 (当該期の遺構) 18・20・65・70・73・78・84・91・93・100・105・122・140・142・149・154・168・188号住

#### II期・・・8世紀中葉

(当該期の遺構) 33・86・138・141・183・200号住

#### III期 8世紀後葉

- a期 (当該期の遺構) 2・10・14・17・21・38・62・69・80・83・87・89・90・92・121・136・137・144・163号住、20号掘立  
 b期 (当該期の遺構) 11・19・24・25・55・63・189・209号住

#### IV期・・・8世紀末～9世紀初頭

(当該期の遺構) 12・32・50・53・59・67・72・79・81・103・113・115・117・147・152・166・202・204・210号住、28号掘立、30号土

#### V期・・・9世紀前葉

(当該期の遺構) 7・16・22・26・30・36・45・49・61・66・107・109・123・129・131・133・145・146・184・205・208号住、23・43・45号土

#### VI期

- a期・・・9世紀中葉  
 (当該期の遺構) 8・41・44・64・68・71・97・102・125・132・148・164・174・176・192号住  
 35号掘立、33号土

b期・・・9世紀後葉

(当該期の遺構) 1・3・13・37・95・98・135・157・175・178・191・193号住  
 21号掘立、64号土

c期・・・9世紀末～10世紀初頭

(当該期の遺構) 42・46・56・119・127・130・170・187号住

#### VII期・・・10世紀前葉～中葉

(当該期の遺構) 29・43・54・104・158・160・167・177・181・182・185・186・195号住  
 2・5・7・13・59・63号土

#### VIII期・・・10世紀後葉～11世紀前葉

(当該期の遺構) 4・9・34・173・194・196・198号住  
 39・46号土

#### 4. 黒色処理の施された土器について

本遺跡出土土器の特徴の一つとして、内面に黒色処理を施した土師器杯の存在を挙げることができる。これまで、奈良・平安時代において、黒色処理が施される杯は、内面にミガキが施された扁平気味な丸底タイプの非クロロ杯、もしくはやはり内面にミガキが施された逆台形タイプのロクロロ杯と考えられてきた。

これに対して、芝崎遺跡では、平底タイプの非クロロ杯および箱形タイプのロクロロ杯にも黒色処理が認められた。その初現は、Ⅲa期すなわち8世紀後葉と考えられ、Ⅳ期すなわち8世紀末～9世紀初頭まで継続的に認められる。

前者が、扁平気味な丸底タイプに系統的に連なる土器であることを考えれば、内面（内外面）に黒色処理が施されることについても理解することができる。後者に関しては、その出現の背景などについては全く不明である。管見に触れた限りでは、柳台遺跡（八日市場市）の161号住から、内外面黒色処理の箱形ロクロロ杯が1点出土しているのみである。

本遺跡の立地条件を考えると、黒色処理ではなく、土壤の影響などによる変色との可能性も完全に否定は出来ないが、今回は黒色処理として報告した。類例の増加が待たれる。

（津田）



写真58 芝崎遺跡出土の黒色処理土器

#### <参考文献>

- 朝比奈竹雄・宮沢久史 2003 「千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第2分冊 八千代市遺跡調査会  
浅利幸一他編 2003 「市原市稻荷台遺跡」 財団法人市原市文化財センター  
飯塚地区遺跡内遺跡調査団編 1986 「飯塚遺跡群発掘調査報告書」 八日市場市教育委員会  
石橋宏克・栗田則久編 『佐原市吉原三山遺跡』 千葉県文化財センター調査報告 第178集  
市立市川考古博物館編 1983 「房総における奈良・平安時代の土器」 史館同人  
神奈川考古同人会編 1986 「シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題」 神奈川考古 第21号  
寺村光晴他編 2004 「下総国府台」 和洋学園校地理文化財調査室  
鳴田浩司・田形孝一編 1999 「千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書 印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡」 千葉県文化財センター調査報告 第358集  
阪田正一他編 1985 「八千代市北海道遺跡」 千葉県文化財センター  
房総歴史考古学会 1987 「房総における歴史時代土器の研究」  
宮内勝巳他編 2002 「神山谷遺跡（1）」 財団法人東總文化財センター発掘調査報告書 第25集  
宮内勝巳「古代下総国東部の土器について」『財団法人東總文化財センター設立10周年記念論集』  
武藤健一編 2001 「千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代市カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」  
第1分冊 八千代市遺跡調査会  
吉岡康暢他編 2001 『国立歴史民俗博物館研究報告 第89集』上巻 国立歴史民俗博物館

### (3) 赤い土器、青い陶器

芝崎遺跡群から出土した奈良・平安時代の土器—土師器を見ると、赤い顔料で彩色されたものをみることができる。その多くは食膳形態である壺や盤で、奈良時代から平安時代初期のものに多い。32・86・91・106号住居跡等の、破片も含めて特定の住居跡から集中して出土している。その住居跡は91号を除いて一辺4mを超える、比較的大形の住居跡である。そういう大形の住居跡と赤彩土器の出土とが、何らかの関係があると考えられる。



写真59 芝崎遺跡出土の赤彩土器

一方、芝崎遺跡と中島遺跡からは青い陶器—綠釉陶器が複数出土した。芝崎遺跡では24号掘立柱建物跡に付属すると思われる竈跡様の遺構から復元可能な碗と、掘立柱建物跡群の南から壺の破片が出土した。中島遺跡では掘立柱建物跡群の周辺から碗・皿、それに手付瓶の把手などの破片50点余りが出土した。破片ではあるが



写真60 芝崎遺跡出土の綠釉陶器



写真61 中島遺跡出土の綠釉陶器

県内でこれだけの点数を超える縁釉陶器が出土した例は、市原市の上総国府推定遺跡のひとつ稲荷台遺跡があるぐらいである。また、中島遺跡では三足壺が出土していて、これにいたっては県内で始めての出土例という希少さである。



写真62 三足壺と灰釉陶器

#### (4) 都から来た土器

芝崎遺跡の栗山川に近い210号住居跡から、一風変わった土器が出土した。形は土師器の壺であるが、色は肌色に近い淡灰褐色で、土はきめ細かく軟らかそうでいて緻密で、胴部の表面には叩き目とも刷毛目ともつかない調整痕があり、なんと言っても口唇部が内側に屈曲していて、一目でこれは全く別の所で作られたものであることが察せられた。調べた結果、京都府の長岡京跡で出土している土器と非常に類似していることが分かり、それを確かめるべく、長岡京跡を調査している財団法人向日市埋蔵文化財センターへ赴き、同センターの國下多美樹氏にこの土器を見ていただいた。

その結果、芝崎遺跡で出土した土器は長岡京跡で出土している土器と同じものであり、まさに都城の土器であるとのことであった。そして作られた場所は特定されていないが、おそらく大阪府北部の高槻市あたりで生産されたものであろうとの意見をいただいた。それは胎土分析において、花崗岩や流紋岩などの酸性火成岩を主成分とし、砂岩やチャートを含むということと、高槻市周辺の地質と一致し、特にチャートを含むことが指標となり、これからも特定された。

それではなぜこの長岡京跡の土器が、遠く東国の芝崎にまで運ばれてきたのであろうか。千葉県内ではこれまで平城宮で出土している土器と同じものが出土している例はいくつか報告され、その多くは食膳形態である壺や盤が多く、芝崎遺跡のように壺でしかも長岡京跡と同じものは例が報告されていなかった。芝崎遺跡群では前述した縁釉陶器や三足壺、そしてこの都城の土器など、県内の奈良・平安時代の遺跡でもあまり見られない遺物が出土していて、都との何らかの関係が強かったその証拠かもしれない。

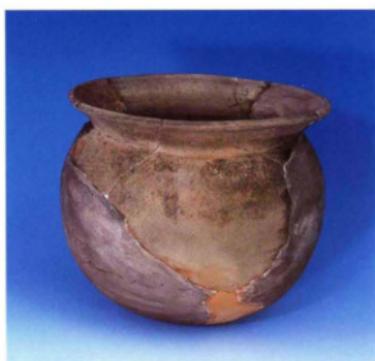


写真63 芝崎遺跡210号住居跡出土の  
都城の土器

### (5) 土器に書かれた文字・記号

芝崎遺跡群の4遺跡の内、文字資料（線刻等含む）を出土した遺跡は、芝崎遺跡、中島遺跡、三反田遺跡の3遺跡で、総数269点の文字、記号等が記された土器が確認された。内訳は墨書き土器101点、刻書き30点、線刻138点となっている。

以下に、芝崎遺跡と中島遺跡の2遺跡を中心にその傾向をまとめた。

芝崎遺跡（図29・写真64・65）

芝崎遺跡における出土文字資料は167個体の遺物で確認されており、内訳は墨書き土器38点、刻書き22点、線刻112点で、22%が墨書き土器である。器種は土師器壺が大半であり、わずかではあるが須恵器壺や土師器皿などもみられる。住居跡209軒中、全体の1割強にあたる25軒で墨書き土器が確認され、線刻等を含めるとその総数は75軒となる。ひとつの遺構から出土する墨書き土器は1～2点が大半だが、176号住居跡からは4点の墨書き土器が出土している。この他、線刻も含めると105号住居跡や184号住居跡、9号溝での出土点数が多い。

墨書き土器に記載された文字数は一字のものが主体であり、二字を超えるものは「千万」や「副中」、「梅成」など数が限られる。また、特定の文字が大半を占めることはなく、「中」や「千万」の個体数がやや目立つ程度であり、記される文字の種類は多い。

これら墨書きの記入部位についてみてみると、体部外面が57%、底部外面が38%と高い割合を占め、体部内面への記入はわずかである。これは他の遺跡にみられる傾向と同一のものである。体部外面には「千万」、「千」、「梅成」、「山太」、「人」など、底部外面には「中」、「副中」、「満」、「家」などの文字がみられ、それぞれ「千万」と「中」の点数が多い。「千万」は全て体部外面、「中」は5点中4点が底部外面に記されており、記入部位に偏りが認められる。

一方、線刻では特定の記号への偏りが顕著で、「卅」と「×」（または「+」）がそれぞれ30点を超えており、この2種で全体の約半数を占める。この2つの記号は分布も特徴的であり、「卅」が69号住居跡や9号古代溝周辺を中心に調査区中央部から集中的に出土しており、その東の掘立柱建物跡群の周辺では「×」（または



写真64 芝崎遺跡出土の墨書き土器

「+」) や「ψ」がやや多くみられる。また、数が多いわけではないが、調査区西端部でのみ「#」が出土しており、これが九字切りなどのまじないを表すとすれば、墨書「千万」などと合わせ、調査区西端部は調査区中央部と様相を異なるといえよう。

これら線刻の記入部位は体部内面が43%と最も多く、底部内面は27%、底部外面は26%と両者とも約3割を占め、体部外面に記されるものは極めてわずかである。体部外面への記入が6割近かった墨書の場合とは明らかに傾向が異なり、記入者が墨書と線刻とで、記入部位を意図的に区別していたと考えられる。特に「卅」については全て体部内面であり、その特殊性が目立つ。

また、多くの遺跡から共通して出土する文字として、万、大、上、井、人、生、千、田、本、家、得、天、山など30種が挙げられており（平川 1991）、芝崎遺跡から出土した文字資料もこれらと共に多くの種類が見られる。高い割合を占めるが、これらに当たるまらない特徴的な文字も見られる。例えば、67号住居跡及び208号住居跡から出土した「玉」である。一文字のみの出土例は極めて少なく、県内で確認できたのは4遺跡のみである。（千葉県史料研究財团 1996）。

しかし複数文字であれば、芝山町庄作遺跡の「国玉神奉」や佐原市東野遺跡の「国玉」などに例がみられることから、出土した「玉」はこれらを略したものと思われる。「国玉神」や「大国玉」は、大國魂神を表すものと考えられ（笛生 2002）、芝崎遺跡でもこの地域神を祭祀の対象としていたのだろう。また、光町神山谷遺跡でも「大国神」の墨書き土器が出土しており、この地域一帯でも他地域と同様に、律令国家による支配を受けても伝統的な「国（地元）の神・古来の土着の神への根強い信仰」（阿部 2005）が維持されていたと考えられる。



写真65 芝崎遺跡出土の線刻土器

次に時期の判別が可能な土器について、時期毎に使用された文字・記号をまとめてみた。( ) 内は点数を表す。

① 7世紀末～8世紀中葉（I期～II期）

墨書：心（1）

線刻：九字切りカ（1）、×（9）、－（2）、「□」（1）、卅（3）、日カ（1）、田（1）、未カ（1）、大カ（1）

② 8世紀後葉～9世紀初頭（III期～IV期）

墨書：中（4）、井（1）、副中（1）

線刻：卅（18）、×（10）、○（2）、儲（1）、∈（4）、玉（1）、山（1）、井（1）、「□」（1）

③ 9世紀前葉～9世紀後葉（V期～VIb期）

墨書：中（1）、山太（1）、人（1）、林カ（1）、山（1）、千万（3）、下カ（1）、兀カ（1）、梅成カ（1）

線刻：×（11）、小（1）、卅（3）、－（2）、人（1）、井（1）

④ 9世紀末葉～11世紀前葉（VIc期～VII期）

墨書：前（1）、九（1）、×（1）

線刻：×（2）、山太（1）、井（1）、－（1）

これらのうち、「卅」は8世紀前葉から9世紀後葉まで長期間にわたって認められる線刻である。分布域が限られることから、その区域に居住する系統を同一とする家族（一族）が長期間にわたって何らかの祭祀行為を行っていたと考えられる。この「卅」が最も多く出土するのは8世紀後葉であり、特に9号溝からの出土が目立つ。この時期は集落が急激に発展するとの同時期であることから、集落の拡大や開墾に伴う祭祀が行われた可能性がある。

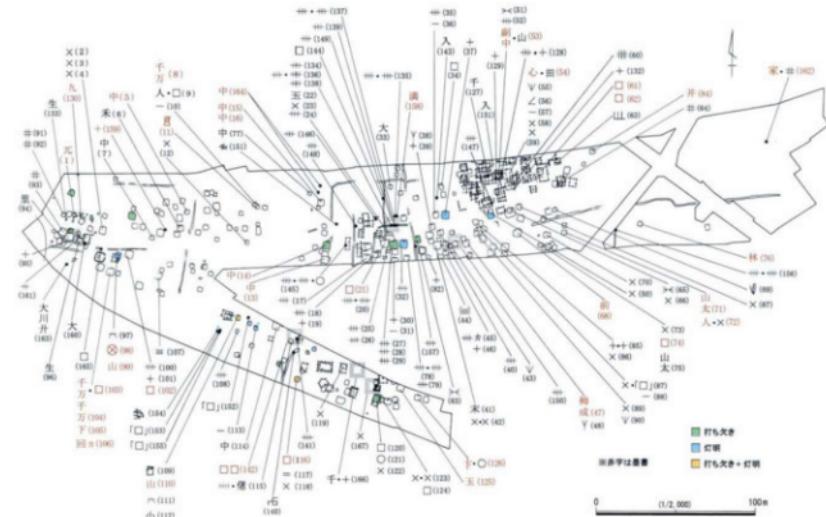


図29 芝崎遺跡文字・記号資料出土分布図

逆に、短期間に限ってみられるものには、「中」や「千万」が挙げられる。「中」は8世紀後葉から9世紀前葉、「千万」は9世紀中葉から後葉の出土である。また、両者とも「卅」と同様に分布域には偏りがみられ、前者が調査区中央部、後者が調査区西端部に集中する。

また、芝崎遺跡で出土した墨書き土器や線刻土器には、その出土数によつていくつかの画期が認められる。第一の画期は8世紀後葉で、それまではほとんど出土していなかった墨書き土器が安定して出土するようになり、点数が増加する。この8世紀後葉から9世紀初頭にかけて線刻土器の出土数のピークとなる。第二の画期は9世紀前葉で、遺構数が減少していないにも関わらず、墨書き、線刻とともに急激に減少する。第三の画期は9世紀中葉から9世紀後葉で、墨書き、線刻とともに出土数が急激に増加し、記される文字や記号も多様化する。墨書き土器のピークはこの時期となる。第四の画期は9世紀末から10世紀初頭以降で、この時期以降、出土数が徐々に減少する。この時期は遺構数も減少しているが、保有割合も前時期に比べ低くなつており、この傾向は遺構数の減少のみが原因ではないと思われる。

最後に出土状況についてみてみると、竈内もしくは竈前から出土している文字・記号は、「中」が3点、「玉」が1点、「并」が1点と、「中」の出土が目立つ。また、17号住居跡では「中」と墨書きされた土器が正位で出土しており、竈祭祀との関連が窺える文字といえよう。

中島遺跡（図30、写真66・67）

中島遺跡で確認された出土文字資料は総数で94点であり、内訳は墨書き土器60点、刻書8点、線刻26点で、64%が墨書き土器である。土師器塊・皿・甕、須恵器転用硯がそれぞれ1点ずつあるほかは、全て土師器塊に記されたものである。



写真66 中島遺跡出土の墨書き土器

墨書で多くみられる文字は「∞」や「上」などだが、特定の文字への偏りは顕著ではなく、芝崎遺跡に比べ「畔伐」、「足伐」、「片野」、「田上」、「子山」など二字のものが多い。これらのうち、「畔伐」は畔代を意味すると考えられ、これは「片野」と共に、『和名類聚抄』にみられる上総国武射郡の郷名であり注目される。神護景雲四（770）年には、「武射郡内畔代郷」（正倉院文書「大僧都法進経師貢上文」）の記載がみられることから、少なくとも8世紀後葉には「畔代郷」が存在したことは明らかであり、これは芝崎遺跡で集落規模が拡大する時期と一致する。また、「足伐」についても、「足代」を意味するとすれば、「畔代」と極めて似た読みであり、同様の意味を持つ可能性が高い。しかし、「畔伐」が全て体部外面に記されているのに対し、「足伐」は全て底部外面への記入であり、記入部位からは両者が区別されていることがうかがえるため、注意する必要がある。これら「畔伐」や「片野」、「足伐」と記された墨書き土器は、調査区西半部に集中しており、「畔伐」は掘立柱建物跡群の周囲、「足伐」はその南側に位置する1号井戸の周囲から多く出土している。

また、墨書の記入部位に関しては体部外面が55%、底部外面が35%と大半を占め、体部内面の3%、底部内面の7%を凌駕しており、この傾向は芝崎遺跡と類似する。

線刻については、「#」や「×」（または「+」）、「ψ」がみられるが、特定の記号に偏るような傾向は窺えない。分布に関しても特定の記号が一部に集中するような偏在性は認められないが、墨書き土器のほぼ半数が調査区西側の掘立柱建物跡群の周囲（12F-17・18・28）から出土しているのに対し、線刻は調査区東側での出土が大半を占め、掘立群の周囲からは刻書・線刻合わせて計34点中7点（20%）が出土しているだけである。また、記入部位に関しても明らかに偏りがあり、底部外面に記されるものが71%と大半を占める。芝崎遺跡でみられた体部内面への線刻はほとんど確認できず、芝崎遺跡で多量に出土した線刻「卅」の特殊性が際立つ。



写真67 中島遺跡出土の線刻土器

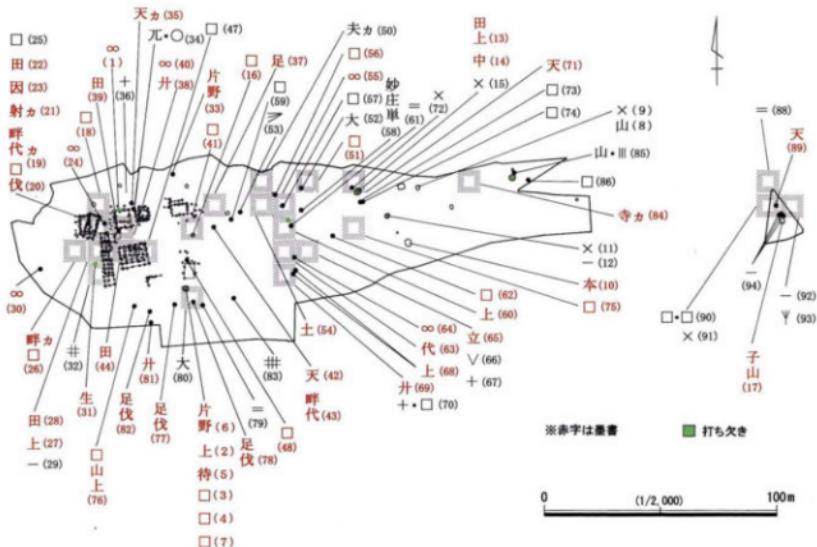


図30 中島遺跡の文字資料出土分布図

## 小結

以上、芝崎遺跡及び中島遺跡を中心に出土した文字・記号について概観した。

これにより、この2遺跡で確認された文字資料の傾向に差異が認められたことから、簡単にまとめたい。

### ①墨書・線刻の割合

芝崎遺跡では墨書き土器の割合が約2割なのに対して、中島遺跡では6割を超えており、その傾向に大きな差がある。この傾向は遺跡の性格によるものかと考えたが、あるいは芝崎遺跡で線刻が多く見られた時期である8世紀代の遺物が、中島遺跡では極端に少ないことも一因となるかもしれない。

### ②文字種類の傾向

以下に芝崎遺跡と中島遺跡から出土した主な文字・記号をまとめる。

#### ○芝崎遺跡出土の主な文字・記号

・× (+)	38点	・山	3点
・卅	34点	・山太	2点
・中	5点	・玉	2点
・井	5点	・生	2点
・「□」	5点	・千	2点
・千万	3点		

#### ○中島遺跡出土の主な文字・記号

・× (+)	8点	・畔伐(代) 4点
・∞	7点	・足伐(代) 3点

・天	4点	・片野	2点
・上	4点	・田	2点

このように、両遺跡から出土した文字・記号で共通するのは、線刻の「×」ぐらいであり、同一の文字種はほとんどみられない。近接する遺跡であるにもかかわらず、これだけ文字種に違いがあるのは逆に注目される特徴といえよう。遺跡間で文字の使い分けがされているようにも感じられる。

### ③記入部位

芝崎遺跡、中島遺跡から出土した墨書き土器は、文字の記入部位が体部外面、底部外面に偏る点で共通する。両遺跡とも内面への記入例は極めて少なく、芝崎遺跡が全体の5%、中島遺跡で全体の10%である。これは坏に液体を入れることを想定し、内面への墨書きの記入を避けたのだろうと考えたが、線刻も芝崎遺跡出土の「卅」を除くとほぼ同様の傾向となる。のことから、記された文字・記号が祭祀行為と関連する場合、坏や皿に供物などを入れた際、文字や記号が見えにくくなることを避けたとも考えられる。

(白崎)

### 参考文献

- 小沢 洋ほか 1996 「上総国」「日本歴史地名大系第12巻 千葉県の地名」(有)平凡社地方資料センター  
 小沢 洋ほか 1996 「下総国」「日本歴史地名大系第12巻 千葉県の地名」(有)平凡社地方資料センター  
 (財)千葉県史料研究財団 1996 「出土文字資料集成」「千葉県の歴史 資料編 古代」  
 笠生 衛 2002 「古代東国集落内の仏教信仰と神祇信仰」「祭祀考古学3」  
 平川 南 1991 「墨書き土器とその字形—古代村落における文字の実相」「国立歴史民俗博物館研究報告 第35集」

### (6) 鎌冶遺構について

鎌冶炉を検出した175号住居跡（資料篇図108・図109）は、当初通常の竪穴住居跡と考え調査を行っていた。しかし、覆土の中層まで掘り進めた段階で鉄滓が数点出土したため、この時点で鎌冶関連遺構となる可能性を考慮し、遺構全体を覆う25cm四方の小グリッドを設定して、覆土をグリッド毎に取り上げた。また、2～3cm以上の大きさの鉄滓については極力ドットを落とした。グリッド別に取り上げた覆土は、0.5mmメッシュの篩を用いて水洗し、鎌冶関連遺物の抽出を行った。鎌冶関連遺物は、楕円形滓・鉄滓・鎌造剥片・粒状滓の4つに分類した。鎌造剥片については個々に計測して点数を数える手間は省き、ISO規格の試験篩（2mm・1mm・0.5mm）を用いてメッシュの大きさ別に分類し、設定した小グリッド毎に計量することにした。

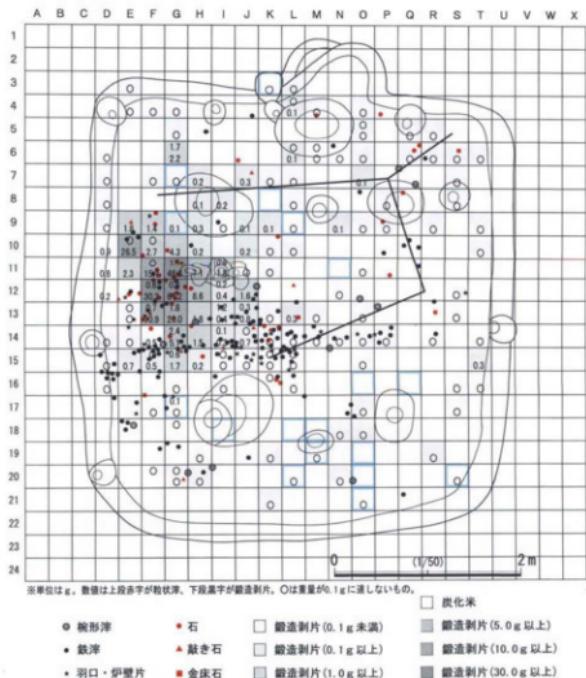


図31 175号住居跡鍛冶遺構



写真68 175号住居跡鍛冶遺構

## 造構概要

175号住居跡（写真68）は、南北4.9m、東西4.8mのほぼ方形である。北壁中央には竈が構築され、主柱穴や壁柱穴のほか、南壁際には出入り口に伴うピットを検出している。鍛冶炉は住居跡の中央西寄り、主柱穴のP3とP4の間でもややP4に寄った位置で検出した。鍛冶炉の規模は南北37cm、東西31cm、深さ14cmで、地山を掘り込み、そこに暗灰色砂を入れ、炉壁には粘質土を貼り付けて炉を構築している。炉壁は東側の一部が途切れており、その部分には炭化粒を多量に含む砂質土が堆積していた（写真69）。羽口はおそらく北側の凹みに据えられていたと考えられ、鍛冶炉内には鉄滓が残存する。出土した鉄滓の一部を分析した結果、この鍛冶炉で行われた作業が鍛錬鍛冶であったことが示されたが、炉の形態は山武郡芝山町岩山中袋遺跡1号鍛冶工房跡（小林ほか 1997）など、精錬鍛冶が行われたとされている鍛冶炉とは同様の規模であり、大きな差異は

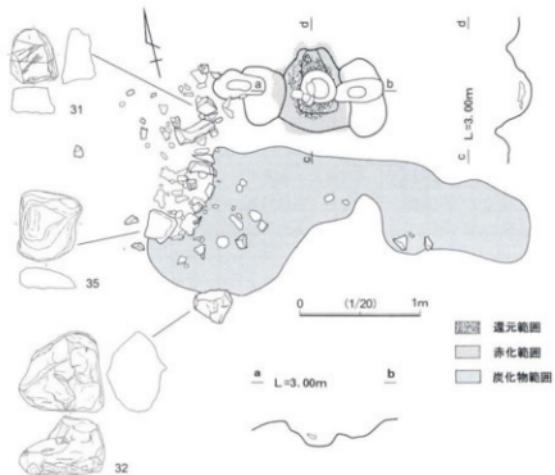


図32 鍛冶炉



写真69 鍛冶炉

無いように思われる。また、炉内及び炉の周囲から出土した炭化材の樹種同定により、コナラやクスギなどの広葉樹が鍛冶作業の燃料材として使用されていたことがわかっている。

鍛冶炉のすぐ西側では、鉄滓や石、焼土が多量に出土した深さ約10cmの浅いピットを検出した。当初はこのピットを鍛冶炉と考え調査を行ったが、炉壁などは確認されなかった。廃滓の廃棄用ピットである可能性も否定できないが、鍛造剥片の分布がこの付近に集中していることから、おそらくはこのピットに金床石が設置されていたと考えられる。

#### 出土遺物

出土遺物は、土師器壺・甕を中心須恵器も多く出土したが、小破片が大半を占め復元可能な遺物は少ない。なかには強い熱を受けて発泡・還元した土師器片も認められた（写真70）。また、土器だけではなく羽口も小破片で出土した状況を考えると、これらは意図的に壊されてから廃棄された可能性がある。このほか、鍛造剥片の水洗選別過程でイネとオオムギの炭化した種子を検出しておらず、これは芝崎遺跡で検出された烟跡での栽培作物を示唆するものと思われる。鉄製品は、刀子（資料編図216-25）や鎌（同26）、釘（同27）などが出土している。しかし、製品としてこの鍛冶炉で製作されたものなのか、修理等のため持ち込まれたものなのか、その判断は極めて困難である。鍛冶関連遺物は、住居南西側での出土量が多い。鍛造剥片は265.0g、粒状滓は13.2gが出土しており、椀形滓を含めた鉄滓の出土量は3,969.5gである。鉄滓に関しては、保存処理等の理由により計量できなかった分も含めると、4,500gには達するものと思われる。



写真70 被熱・還元した土師器



写真71 敲き石



写真72 金床石



写真73 鍛造剥片

このほか、鍛冶作業に関連して使用されたと考えられる遺物として、石類が多量に出土している。

花崗岩製の砥石（31）や金床石と思われる閃綠岩（33・写真72）などが認められ、用途不明の石も含めるとその総量は7,254.0 gとなる。また、鍛冶に使用するかなはし鉄鉗や金槌など金属製工具類は出土していないが、一端に敲打痕を持つ比較的大型の安山岩製敲き石（32・写真71）が鍛冶炉の近くから出土している。必ずしも鍛冶の鍛打に使用されたとは限らないが、出土状況からそれ以外の可能性も考えにくい。鉄製品の製作には大きすぎる感じのもの、あるいは精錬鍛冶であればこのような石を用いた鍛打作業が行われたのだろうか。

これら出土遺物の住居内における分布状況を見てみると、鍛冶関連遺物は住居南西側、他の土器類は住居東側での出土が目立つ。175号住居跡のように、1軒の豎穴住居内に鍛冶炉と竈が共存するタイプについては、鍛冶工房としての専用性が低く（内山 1998）、住居と作業場とを兼ねた施設（中島 1996）であるとの指摘がされている。このことから175号住居跡についても、南西部を中心とした住居西側が鍛冶作業の場、ほかの住居北側から東側が寢食の場として使用されたと考えられる。

#### 操業時期

鍛冶遺構の操業時期については、出土遺物から9世紀後葉ごろと考えられるので、芝崎遺跡における古代集落の初現（7世紀末～8世紀初頭）からはかなり遅れたものになる。このため、この鍛冶遺構の設営・操業については次のような可能性が考えられる。

（1）既存の集落において、新たな畠地の開墾や何らかの建築物（例えば調査区中央部の掘立群など）を建設するために集められた鍛冶工人の一部が、その後も集落内の操業を行うため住居と作業場を兼ねた鍛冶工房を設営し、農具の製作や修復など継続した鍛冶活動を行った。ただしこの場合、この鍛冶炉が設営される前に専用性の高い鍛冶遺構がほかに存在した可能性も考えなければならない。

（2）集落の拡大や畠地の開墾など計画的なものではなく、日常的な畠地の耕作により消耗・破損した農具の修復や新たな農具の製作を必要に応じて行うための、専用性は低いが継続した操業が可能な住居と作業場を兼ねた鍛冶工房が設営された。しかし、専門工人が集落に招かれ農鍛冶として住みついたのか、鍛冶技術のみが伝習されたのか、明らかにすることは困難である。

検出した鍛冶遺構が1軒のみだったことやその時期などから、（2）の可能性がやや高いように思われるが、「鍛冶工房を伴う集落遺跡では、集落内に「仏堂」と思われる施設や仏教的な遺物を伴うことが多」い（神野 2004）との指摘もあり、集落内に「村落内寺院」が存在するような場合、鍛冶遺構の集落における位置づけは大きく変わってくるため、慎重な判断が必要とされる。この鍛冶遺構の設営目的やその活動内容についてより明確するためには、今後、芝崎遺跡の性格をさらに検討していく必要があるだろう。

また、芝崎遺跡ではこの175号住居跡のほかにも、住居床面に炉をもつ遺構が3軒（20号、27号、42号住居跡）検出されている。いずれも出土遺物からは鍛冶遺構と考えにくいものだが、鍛造剥片の存在に注意して調査が行われたわけではないため、その可能性を完全には否定できないと思われたので、今後の検討課題として念のため提示しておく。

#### 芝崎遺跡出土の鍛冶関連遺物と金属製品

最後に鍛冶遺構に関連して、芝崎遺跡における鍛冶関連遺物について少し触れたい。鍛冶関連遺物は175号住居跡出土分を除くと総量1,415.8 gで、13軒の住居跡、2基の土坑から出土している。鉄滓が出土した遺構の時期は、全て8世紀後半以降のものであり、特に9世紀中葉～9世紀末にかけてのものがほぼ半数を占めている。これは鍛冶遺構の時期が9世紀後葉であることを考えると、妥当な傾向といえよう。しかし、その出土分布には大きな偏りがみられず、鍛冶遺構の175号住居跡周辺を中心に出土するようなこともなかった。逆に、

鍛冶遺構からは離れた位置の68号住居跡や190号、191号住居跡などの出土が目立つ。これらの住居跡周辺は、墨書き土器や灯明、鉄鉢形土器などの分布からみて祭祀的な雰囲気の強い場所であり、出土した鉄滓は何らかの祭祀行為と関係していたのかもしれない。

金属製品は、堅穴住居跡209軒中30軒、掘立柱建物跡72棟中1棟、土坑82基中5基から、刀子や鉄鎌、鉄鎌、鉄釘など54点が出土しているが、遺跡の規模から考えると出土量は少ないようと思われる。鉄器の種類は刀子が全体の約4割を占めており、その出土数が目立つ。烟跡が調査範囲のほぼ全城で検出されていることを考えると、鎌など農具類の出土点数が多いかと思われたが、その出土量は全体の約15%であり鉄鎌や小札などの武具類とほぼ同じ割合である。鉄製品の出土数は8世紀後葉から9世紀前葉がピークであり、8世紀中葉以前の遺構からはほとんど出土しておらず、8世紀後葉に急増している。これは8世紀後葉に、集落規模が急激に拡大するとの時期的に一致している。芝崎遺跡のように8世紀後葉に集落規模が急激に拡大する遺跡は山田水呑遺跡や大綱山田台遺跡群など山武郡にもみられ、いずれも「開発型集落」とされている（栗田 2004）。集落の拡大や開墾に重要な役割を果たしたと考えられる鉄製品がこの時期に急増することからも、芝崎遺跡が開発型集落としての性格を強く持っていると言えよう。

また、9世紀に入るまでは鎌などの農具類はほとんどみられず、刀子や鉄斧等の工具類や鉄鎌、小札等の武具類が主体となる。これは8世紀後半に下総国を含めた東国諸国が、当時の征夷政策の兵站基地、供給基地として諸負担を行っていたことが関係してくるのだろうか。農具類は9世紀に入ると出土するようになり、その後10世紀中葉までは各時期にみられる。逆に武具類は、9世紀後葉を最後に出土しなくなる。このことは、征夷政策により疲弊した下総国で、天長八（831）年に空閑地七百余町が勅旨田とされ、広大な土地の開発が行われるようになったことに関わりがあるのかもしれない。このように鉄製品の出土傾向からは、芝崎遺跡を取り巻く地域社会の変化がうかがえるよう思う。

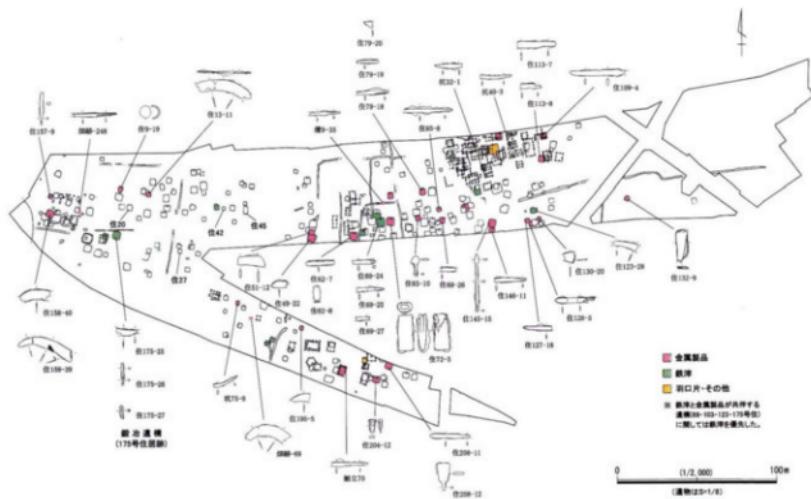


図33 芝崎遺跡出の金属製品・鍛冶関連遺物出土分布図

次に分布をみてみると、明らかに調査区西側に比べ調査区中央部での出土量が多い。特に調査区中央部の69号住居跡・72号住居跡周辺では袋状鉄斧や鉄鎌、小札などやや特殊な遺物が目立つ。また、調査区中央部と調査区西端部の間の住居群（10号住居～46号住居跡周辺）では金属製品だけでなく鍛冶関連遺物の出土もわずかであり、分布がやや希薄である。この周辺は墨書き土器や打ち欠きされた土器、灯明皿なども出土量が少なく、それにかわるように、先に提示した竈を持たず炉のみの遺構（20号、27号、42号住居跡）が偏在している。また、この区域の東側では竈も炉も持たない長方形の遺構（45号住居跡）も検出されており、何らかの工房跡となる可能性がある。これらのことから、この周辺が単なる居住域ではなく、何らかの生産域として利用されていたとも考えられる。

(白崎)

#### 参考文献

- 内山敏行 1998 「関東地域の古墳時代の堅穴鍛冶遺構」「新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡」（財）栃木県文化振興事業団  
神野 信 2004 「第2章第5節1（5）鉄器生産と鉄器普及」『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』  
栗田則久 2004 「第2章第5節1（1）村落の消長とその背景」『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』  
小林信一・矢本節朗 1997 『土木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書－三里塚御料牧場遺跡・岩山中袋遺跡（空港No.2遺跡）－』  
佐々木稔ほか 2002 『鉄と銅の生産の歴史－古代から近世初頭にいたる－』  
中島信親 1996 「古代鍛冶工房と鉄器生産体制の変容について」『（財）向日市埋蔵文化財センター年報 都城』7  
深沢靖幸 2003 「武藏国府における手工業生産」『府中市郷土の森博物館紀要』第16号  
松崎元樹 2004 「古代村落の生産基盤－丘陵地の鉄器生産基盤について－」「落川・一の宮遺跡を考える－多摩の古代  
～中世をめぐって－」東京考古談話会  
道澤 明 2005 「芝崎遺跡I」（財）東縦文化財センター  
安間拓巳 1995 「古代の鍛冶炉－その形態および鍛治行程との関連について－」『考古学研究』42-2  
安間拓巳 2000 「古代の鍛冶遺跡」「製鉄史論文集」  
(有)平凡社地方資料センター 1996 『日本歴史地名大系第12巻 千葉県の地名』

#### (7) その他

芝崎遺跡群の奈良・平安時代でそのほか注目されるものには、碁石と瓦がある。

碁石は栗山川に近い4・195号の2軒の住居跡から、合計で5点出土した。県内での碁石の出土例は聞かぬが、他県で出土した例の多くは自然石を利用したものが多い。しかし、芝崎遺跡で出土した碁石は5点とも扁平な円形に加工していて、その形状から明らかに碁石であることが明白である。出土した碁石は石英製の白石が4点、珪質頁岩製の黒石が1点である。形状は碁石であっても5点のみでは実際には碁は打てない。かと言つてそれ以外は上述したような自然石で代用したならば、その碁石が出ていていいと思われるが、調査中も整理中にもそれらを検出することはできなかった。それではこれらの碁石が何の目的で芝崎遺跡に存在したか、様々検討する必要があろう。

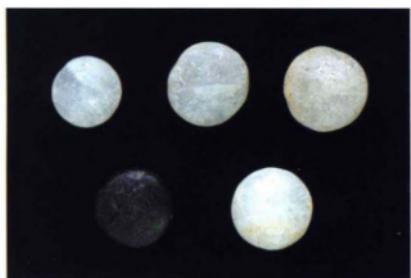


写真74 芝崎遺跡出土の碁石

もうひとつ、芝崎遺跡と中島遺跡からは奈良・平安時代の瓦が出土した。

奈良・平安時代の瓦と言えば寺院跡から出てくるのが普通である。この近辺では匝瑳市の大寺廃寺や成東町の真行寺廃寺が知られ、それぞれ特徴的な瓦が出土している。

芝崎遺跡では平瓦2点と丸瓦1点が出土した。その内の平瓦1点には十字櫛形の押印文様が付いていて、その類例は真行寺廃寺の瓦と同じものである。中島遺跡では格子目の付いた平瓦が9点、布目の付いた丸瓦が1点出土している。平瓦はどこのものか特定できないが、ひとつ真行寺廃寺のものがあることは、遺跡環境の項で述べたように、九十九里平野縁辺に沿う道があったこと示す一例であろう。



写真75 芝崎遺跡群出土の瓦

#### 4. 鎌倉・室町時代（中世）

鎌倉・室町時代は、平安時代の中期、古代律令制の崩壊に伴って、地方の土地占有をめぐる争いの中から出現した武士が、平安時代後期、次第に力を身に着け、ついに政権をとった時代であった。鎌倉時代は源頼朝が鎌倉に幕府を開き、室町時代は京都室町に幕府を置いたことからこう呼ばれるが、その間には天皇方による政権巻き返しという南北朝時代があったが、武士中心の時代という趨勢は変わらなかった。鎌倉・室町政権とともにその礎を作ったのは関東武士で、その主力は桓武平氏を祖とする坂東八平氏で、その中に千葉氏もいた。その平氏発祥の地が遺跡の近くを流れる栗山川の河口付近の横芝町屋形で、ここに始祖の高望王が上総国司を辞した後住したという伝承が残っている。まさにこの地域が武士発祥の地の一つと言えよう。

芝崎遺跡群では平安時代の中期から後期にかけて、古代的な竪穴住居跡が消え、それに伴って烟跡などもなくなって、集落がいったん途絶える。そして平安時代末期の12世紀になると、再びこの地に人々の姿が見え、集落を作るようになる。特に芝崎遺跡では平安時代後期の空白期を挟んで、遺構が全く異なった方位を示していくで継続性が認められないことから、断絶があったことは間違いないと思われる。この平安時代後期の空白、断絶は、芝崎遺跡群に限らず、広く多くの遺跡で確認されているが、この現象は全く不明で謎の時期と呼ばれている。この空白期を経た平安時代末期には、遺構が異なった方位を示すだけでなく、住居跡は高床の掘立柱建物跡になり、道や溝が増え、遺物では中国製青磁・白磁や古瀬戸・常滑などの中世的な陶磁器が出土する。

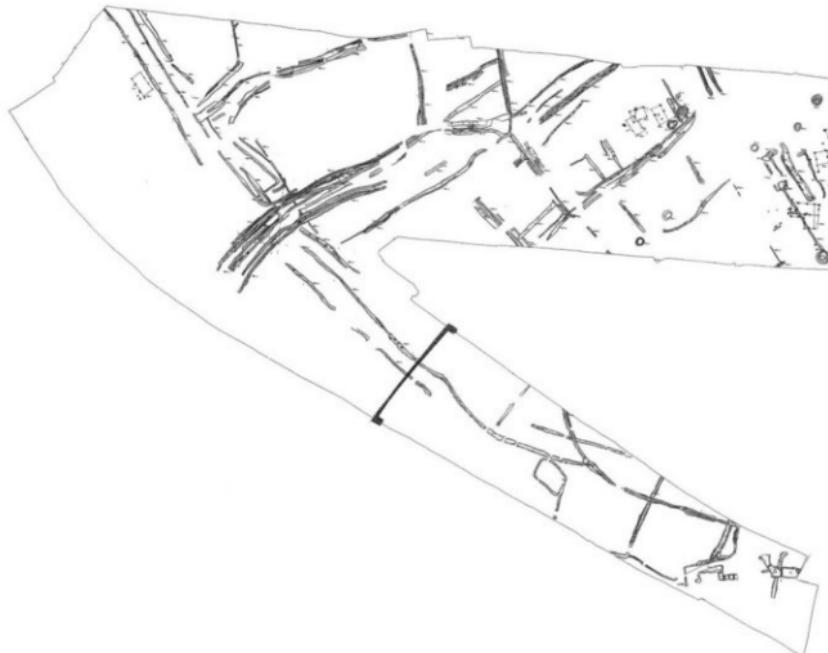


図34 芝崎遺跡・中島遺跡の

つまり、こうした遺跡では源頼朝が鎌倉幕府を開く前に、すでに中世的な世界になっているのである。すなわち、平安時代中期に始まった律令制崩壊と武士の出現は、次第に中世的な時代へ移行する時期であったと言えよう。その結果として、鎌倉幕府が生まれ、鎌倉時代になったと考えられる。

芝崎遺跡群では遺物から見る限り、室町時代中期（15世紀半ば）頃までは順調に発展していくように思われるが、特に中島遺跡ではこの時期を境にして居館が断絶している。芝崎遺跡のほうでも室町時代後期になると、遺物は出土しているが、道跡・溝を除いて住居跡等の遺構は不明になる。この時期、各地で乱が勃発して世上が不安定になり、庶民の生活防衛とこの地域の権力構造の変動があったのかもしれない。中島遺跡ではこの後の遺構・遺物はほとんど見られなくなるが、芝崎遺跡では道跡・溝はこの後も残り、現在までほぼ継続していることは前にも述べたとおりである。以上、芝崎遺跡群における鎌倉・室町時代の概要を述べてきたが、次に検出した遺構と出土遺物について少し詳しく触れてみたいと思う。

### 1) 集落と居館の変遷について

#### 1. 芝崎遺跡

芝崎遺跡では調査区域の中央部から西よりの所で、南西一北東方向の溝や道跡が幾条も検出され、この方向が意識的に特定され、何代にもわたって掘り直され使われてきたことが伺える。また目を西に延長して眺めるとき横芝町の坂田城跡を遠望でき、振り返って東に目を向けると芝崎の台地下の縁辺の直線を見ることができる。



中世遺構分布

おそらくこの道跡が九十九里平野の縁辺を、西から東の跳子へ向かっていた街道であったかもしれない。遺跡中央部から東寄りでは、この道跡と関連する方位で立ち並ぶ掘立柱建物跡や溝があり、道に沿って集落が形成されていたことが推察される。中央部の2~4・6・7号中世建物跡、1号中世竪穴、3号井戸跡や周辺の溝などは、出土遺物から14~15世紀初頭の遺構と思われ、ここに室町時代前期の集落が形成されていたことが推定される。また、少し東に行った12E-47-8・9・13・14にある10・11号中世建物跡は、少し下った15世紀室町時代中期になり、その周辺には粘土貼土坑があり、時期によって遺構の組成の変化を捉えることができる。



写真76 芝崎遺跡中世掘立柱建物跡



写真77 芝崎遺跡西部の中世溝



写真78 芝崎遺跡中央部の道跡（西を向いて）



写真79 芝崎遺跡中央部の道跡（東を向いて）

そのほか、1・5・8・9号中世建物跡は前出の遺構と方位が異なり、時期は出土遺物から13世紀の鎌倉時代の遺構であると思われる。この鎌倉時代の1号中世建物跡の脇には、建物跡と方位を同じくして3条の溝が走る。その内の1条は、栗山川に沿って道跡のように東へ延びる。この溝の覆土は黒色土で古代遺構の覆土に近く、青磁蓮弁文碗の破片が出土していることから中世でも初期の遺構と判断された。それに対して栗山川に近い南東部では、鍵の手状に屈曲し底には仕切りが設けられた堀跡のような浅い溝や、障子堀の底の様な穴列が検出された。これは遺物から15世紀後半の遺構と思われ、堀跡とすればその北側に居館のような施設があったと予想される。このように中世でも遺構の変化は見られ、13世紀では散在していた集落が、14世紀になると集村化し、15世紀にはまた分村した様な離合集散があつたり、居館のような施設が作られたりと、ここの地理的な条件を考えると活発な人の動きが合ったことが推定される。

芝崎遺跡では東部で中世の畠跡と思われる遺構が検出され、特に12E-47・57から12E-48・58では僅かな傾斜

があり、その傾斜に沿って畝溝が掘られた畑跡があり、出土遺物から12~13世紀の中世でも初期の畑跡であることが確認された。この東部傾斜面に沿うように北東—南西方向に溝が走り、畑を区画していく、傾斜面の畝溝は直角に走るが、これより東側の低地には区画溝に平行するように畝溝が走る畑跡も検出された。



写真80 芝崎遺跡東部の中世畑跡



写真81 芝崎遺跡建物跡横から出土した青磁碗

## 2. 中島遺跡

中島遺跡では東西に長い遺跡の西半分を調査し、その中央部を中心に中世の遺構が検出された。そこには東西に長い砂州を分割するように南北に走る溝が4条走り、4つの区画を形成している。その中の中央西側の区画内にはまた小さい溝が曲線を描いて廻り、多数の掘立柱建物跡の柱穴が検出された。そしてこの区画の南側で、区画両側の仕切り溝が直角に曲がってほぼ中央で出会い、区画を囲っていることが分かった。しかし北側では調査範囲が限られたため両側を繋ぐ溝は確認できなかった。この区画の東側は一回り狭い区画で、この北側には区画を囲む溝が確認され、やはり中心部には掘立柱建物跡の柱穴が多数検出された。この大小2箇所の区画を見ると、中世遺跡に多く見られる方形居館が連想され、また、区画を仕切る溝を堀に喻え、周囲を沼沢地に囲まれた埼玉県鴻巣市にある忍城跡を例とする水城ということが言えないだろうか。

中島遺跡では中国製の同安窯系青磁皿が出土していることから、12世紀末頃にはここに再び人が居住し始め、13世紀の鎌倉時代には居館的な建物が建っていたと思われる。前出の方形居館は主にこの時代に見られる、小領主層の武士の館であったことが多いと言われ、館の周りにはほぼ正方形に溝を掘り、その内側は土塁を築かず板壁を廻らただけの簡単な構造であったようである。中島遺跡の居館がいつ頃から溝を廻らすようになったかは断定できないが、その覆土の状態から判断すると遅くとも14世紀には掘られていたと推定される。その14



写真82 中島遺跡の居館跡

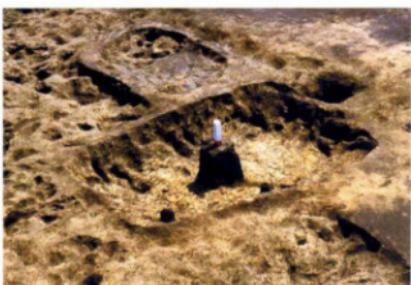


写真83 中島遺跡の粘土貼土坑



写真84 中島遺跡の池のような土坑



写真85 中島遺跡の火葬坑



写真86 全体を発掘した居館跡



写真87 中島遺跡の掘立柱建物跡

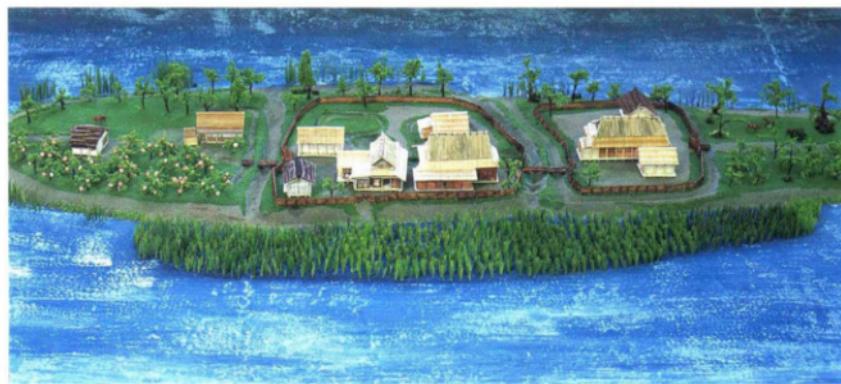


写真88 中島遺跡中世居館の復元模型

世紀からの居館の変遷を示したのが図35で、3が15世紀半ばに断絶する直前の遺構分布である。中島遺跡の居館は、ほぼ継続して主に南側に建てられ、その場所もほぼ同じ所に繰り返し立て替えられている。その結果として発掘で表れた柱穴は、足場がないほどに連接していて、一時期の建物跡の柱穴を抽出することが困難で、ほとんど建物跡の構造を分析することは不可能であった。そのため資料編図に示した建物跡柱穴並びは、あく

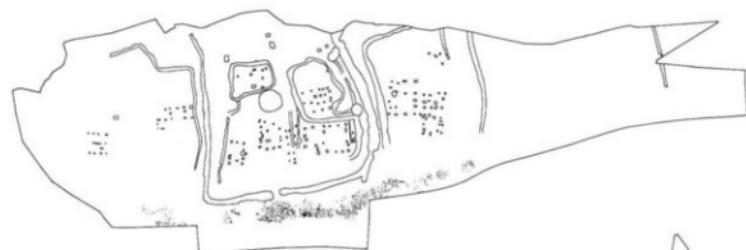
まで仮定した構造であること申し添えておく。その図を見ても、本編図35を見ても分かるように、溝で閉まれた区画内の建物跡は仮定であるが、いずれも規模が大きいもので、やはりここにある程度の有力者が住んでいたことが想像される。また、この図を見ても分かるように中段の2の時期から区画内に不定形に廻る溝が2条



1. 14世紀前半



2. 14世紀後半



3. 15世紀前半

図35 中島遺跡の居館変遷 (14~15世紀前半)

(4・6号溝)あり、特に6号溝の方は途中蛇行していて何か意味深長な形状をしている。関東の中世城館跡ではこれまでにあまり庭園跡は検出されていないが、このような溝を庭園の一部として見ると、有力者の居館跡としての新たな例といえよう。

中島遺跡の居館跡の南側前面、溝の外側には、奥行き10m、幅100mほどの範囲にこの時代の水田跡が検出された。水田跡には畔のような区画はなく、一面同じように水田が広がり、厚さ15cmほどの黒色旧水田土壤が堆積し、その基底に鉄分とマンガンが沈着して硬くなった砂層があり、その基底面には多数の足跡が残され、中には一際深い大型獸のものも一列見られた。この水田跡の中からは同時代の井戸跡が4基ほど検出され、そのうちの1基(2号井戸跡)からは井戸枠を組んだものが出土した。この井戸枠は丸太材を柱として梁を渡し、その梁に破竹を隙間なく張った構造で、類例として東京の青戸葛西城跡で出土していることから関連性を指摘できよう。井戸枠が出土したこの井戸跡や溝からは、低地であることに利して、漆器や折敷などの中世に特徴的な木製品が多数出土したが、この居館跡の主を特定できる文字資料はなかった。



写真89 中島遺跡検出の中世水田跡



写真90 中世水田跡の断面



写真91 水田の中から検出した井戸跡



写真92 井戸跡の中から出土した漆器碗

## 2) 出土遺物

芝崎遺跡群では多くの中世陶磁器と共に、低地であることから、特に中島遺跡で多くの木製品が出土した。また当時も農地が広がっていたことから農具があったと思われるが、鉄製農具はあまり残されず、その代わりその農具を研ぐ砥石が多数出土した。さらに沼沢地あるいは川が近いことから漁労具と思われる土錘も出土したもの、本遺跡群の特長であろう。ここではそれらについて少し述べることにする。

## 1. 陶磁器について

芝崎遺跡群4遺跡それぞれから中世陶磁器が出土したが、特に芝崎遺跡と中島遺跡から多くの多様な陶磁器が出土した。ここではその中世陶磁器について、少し詳しく述べみたいと思う。

芝崎遺跡では、中世遺構が遺跡全体で検出されていると共に、陶磁器をはじめとした遺物も遺跡全体から出土している。その中で陶磁器を見ると、中国製の輸入陶磁器から、瀬戸・美濃、常滑、在地産土器など、当時使われていた主要なものが見られる。中国製陶磁器では、遺跡東部から12世紀の白磁四耳壺の破片が出土したのが最も古いもので、次いで遺跡各所から13世紀の青磁蓮弁文碗が出土している。新しいものでは16世紀の染付皿が出土し、中国陶磁器の合計点数は20点になる。あまり顯著でない中世遺構のみが検出された芝崎遺跡に対し、中世陶磁器の中で最も高価な中国陶磁器がこれだけの点数が出土しているのは注目される。一方国産陶磁では13世紀の渥美壺、常滑山茶碗・鉢・壺、14世紀の古瀬戸瓶子はじめ、15世紀を盛期に多数の陶磁器が出土し、遺跡における中世の盛衰を現しているかのようである。

芝崎遺跡に対して中島遺跡は居館跡が検出され、中世遺跡としては格が上と言えよう。遺物の多くはその居館跡を廻る溝や居館跡内の土坑から出土し、ほとんどが破片であった。その中島遺跡では中国陶磁器では12世紀の同安窯系青磁皿をはじめ、13世紀の龍泉窯系青磁蓮弁文碗、白磁蓋など、合計26点出土している。国産陶磁器では12世紀の渥美壺はじめ、13世紀の古瀬戸瓶子・四耳壺、常滑鉢・壺、そして15世紀になると古瀬戸後期には縁釉小皿・平碗・盤類・茶壺など様々な器種があり、常滑では8・9型式の鉢・壺が最も多く、在地産土器の内耳土鍋も多数出土し、この時期が最も栄えたことが分かる。この盛期を境にその後の陶磁器は僅か2点あるのみになる。つまり、中島遺跡の中世居館は15世紀半ばに終焉を迎えたと推定され、芝崎遺跡とは異なる歴史をたどる。

このように芝崎遺跡と中島遺跡では多数の様々な陶磁器が出土したが、先年報告した同町北部の篠本城跡でも同様な陶磁器が多数出土し、県内でも光町内の中世遺跡からは比較的多く中世陶磁器が出土している。それは光町がどのような地域的特徴を有していたか、前報告で少し触れたが、改めてここで再び検討してみたい。

この地域の中世流通経済について注目される論考がある。「中世房総水運史に関する一考察」(遠山 1996)で、

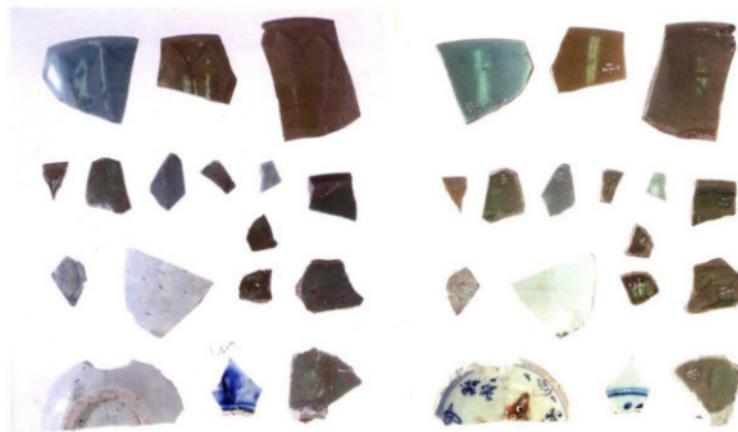


写真93 芝崎遺跡出土の貿易陶磁（左表、右裏）

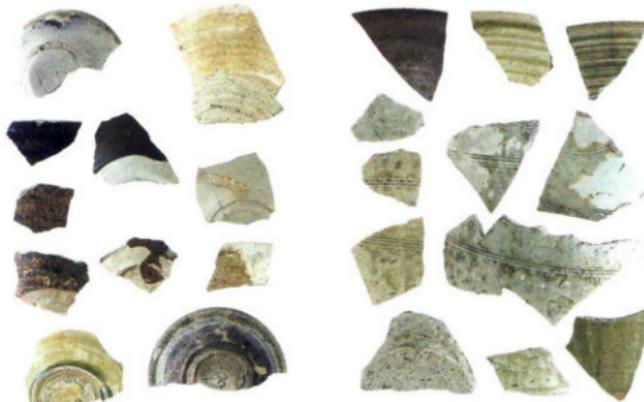


写真94 芝崎遺跡出土の古瀬戸製品



写真95 芝崎遺跡出土の涅美・常滑製品



写真96 芝崎遺跡出土の中世土器

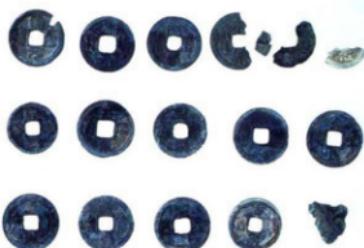


写真97 芝崎遺跡出土の中世銭貨

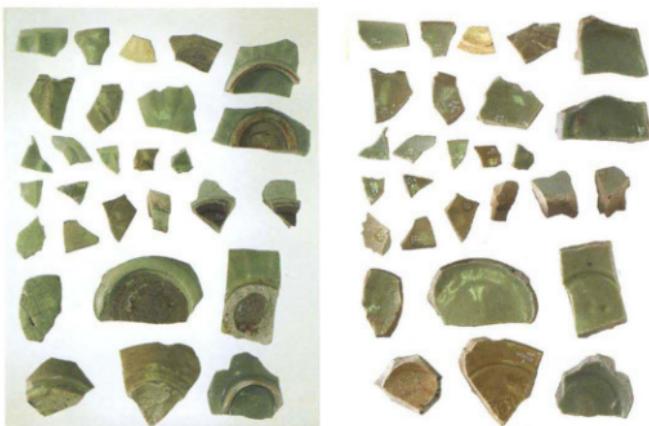


写真98 中島遺跡出土の貿易陶磁（左表、右裏）



写真99 中島遺跡出土の古瀬戸製品

栗山川流域の船戸・船津の地名を追って、当時の船着場を探り当て、河川運輸のありかたに迫ろうとした。そこにはその当時の輸送形態の主役を船による水運と捉え、海上輸送と河川輸送とを結びつけて考えたものであったが、海上交通が不明な上、この水運で得られたであろう物資のデータが少なかったため、今後の検討にゆだねられた。栗山川流域には遠山氏が指摘する「船戸・船津」地名は9箇所におよび、近世でも数箇所の荷物の積み出し場があったことを確認している。遺跡の近くでも橋場というところが、やはり積み出し場であったと言われている。このように栗山川が中世から近世にかけて、この地域の水運の重要な役割を担っていたことは確



写真100 中島遺跡出土の渥美・常滑製品

かである。その栗山川の流域に当たる芝崎は「船戸」地名こそないが、九十九里平野の縁辺を走る街道との交差点に当たる。すなわちこの地域の交通、水運の要衝であったと考えられ、その要衝を押さえたのが中島遺跡の主であったとしても外れではないだろう。海路船によって運ばれた主な物資は陶磁器で、中国製陶磁器をはじめ、国産の古瀬戸・常滑などが、多量に入ってきた。その結果として、先に報告した篠本城跡、そしてこの中島遺跡では、県内でも比較的多くの搬入陶磁器が出土している。

搬入陶磁器の中でも中国製陶磁器を見ると、芝崎遺跡群では多様なものが出土している。白磁、青磁、青白磁、染付など、産地で分かるものは同安窯系、龍泉窯系、景德鎮、その他不明なものなど、中国各地の産地にわたる。その産地の中の龍泉窯と景德鎮窯を訪ねてみた。龍泉窯は浙江省南部の山中にある龍泉市を中心にして数十kmの範囲にある青磁を主に生産された窯で、宋代から明代まで操業され、その窯の数は300群、千基以上になるといわれている。その中の安福窯では青磁だけでなく、天目碗も同時に焼かれていたことが確認された。またそのほかに安仁口窯と大窯では蓮弁文碗のほか日本ではあまり見られない高足杯が多数あり、産地で同時に焼かれた異なる製品も、消費地の好みに合わせて分別して輸出されたことが想定された。景德鎮窯は江西省にある中国でも磁都と呼ばれる、今日でも焼き物の町として有名である。ここは中国唐代の後の五代に操業が始まり、初めは白磁・青磁が、元代になると染付（青花）、明代には色絵・五彩・豆彩、清代には粉彩へと進化・発展して現在に至った磁器生産地である。ここでは市の中心に元代に始まった官窯跡があり、ここを中心にして町が発展していることが分かり、郊外の湖田窯では庶民向けの磁器を生産した民窯跡が発掘され、遺跡整備されている。この湖田窯で焼かれた磁器が日本に輸出され、芝崎にも来ている。湖田窯の近くにある五代の黄泥頭窯は白磁と青磁が同時に焼かれていて、龍泉でも見られたように中国の窯では異なった種類の磁器焼成も行っていたことがわかった。窯の構造は宋代から元代までは日本で言う細長い登窯で長さ10~80mある龍窯と呼ばれ、明代以降になると小型で円形の馬蹄窯になる。焼成は青磁も染付（下絵付）も釉は生がけ（素焼き）し

ないで釉をかける）で、1回で焼き上げるという。そのため、窯跡では生地（素焼き物）は全く無い。このように中国で大量に生産された陶磁器は、世界各地に輸出され、その一部が日本の、そして芝崎に来たとしても、高価ではあっても決して特別なものではなかったと思われる。（写真96～101は全国埋蔵文化財法人連絡協議会—中国研修による）



写真101 中国龍泉安仁口窯



写真102 安仁口窯に散乱する青磁



写真103 龍泉安福窯



写真104 安福窯に散乱する青磁



写真105 中国景德鎮湖田元代龍窯



写真106 中国景德鎮湖田明代馬蹄窯



図36 中世日本の陶磁器生産地と港



図37 12～15世紀の中国陶磁器産地と貿易港

表1 芝崎遺跡中世陶磁器分類表

類別	時期区分	12~13		14		15		16		計	
		器種		B1~7		4	D2~1		1		
貿易陶磁	龍泉窯系青磁碗									12	
	皿									1	
	盤			1						1	
	蓋			1						1	
	青白磁梅瓶			1						1	
	白磁四耳壺		1							1	
	白磁皿						D~1			1	
	染付皿								C4~1 B2~1	2	
	計	1	1	9		4		2	1	1 1 20	
瀬戸・美濃	前期		中期		後期		大瀬				
	I~II	III~IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV古 新	
	綠釉小皿						2	13	3		18
	折線小皿						1				1
	丸皿								2	1	3
	端反皿							1			1
	折線皿									2	2
	鉢皿					1					1
	平碗						2	2	1		5
	天目碗						2			1	3
	折線深皿							1			1
	鉢目付大皿					2					2
	盤類					1	1	1			3
	擂鉢									2	2
	擂鉢系小鉢						2				2
	片口鉢					7					7
	香炉										
	瓶子		10					1			11
	広口有耳壺						2	2			4
	茶壺							1			1
	初山天目碗							1			1
	志戸呂土瓶							1			1
	擂鉢							1			1
	計		10		1	8	6	21	13	2 2	4 2 69
渥美	型式	1~5	6a	6b	7		8	9	10	11	12
	甕		5								5
常滑	山茶碗			1							1
	片口鉢	7	5		3		13	他24			52
	壺		4								4
	甕	7	11	3	2			8	他2		33
	計	19	21	3		5		37	10		95
土器小皿					1				2		3
内耳土鍋								26		1	27
茶釜土器								5			5
	計				1			31	2		33
合計		20	21	14	9		50	79	3 2	6 3	207

表2 中島遺跡中世陶磁器分類表

年代	12~13			14			15			16			計			
	器種	分類														
貿易陶磁	同安窯系青磁皿	1												1		
	龍泉窯系青磁碗		B1-1	B2-2			7	1						21		
	皿		1											1		
	小盤		1											1		
	壺		1											1		
	白磁蓋		1											1		
	計	1		15	2		7	1						26		
瀬戸・美濃		前期			中期				後期			大窯				
		I·II	III·IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV古	IV新	1	2	3	4
	綠釉小皿									14	21					35
	卸皿							2	1		1					4
	丸皿													1		1
	小杯									2						2
	平碗							3	8	17	31					59
	碗形鉢									1						1
	天目碗									6						6
	折縁深皿									5	2					7
	直縁大皿									2						2
	卸目付大皿							3	4	2						9
	盤類							23			6					29
	擂鉢										9					9
	瓶子	2	6							1						9
	四耳壺	1														1
	片口瓶							2								2
	水注		2													2
	花瓶	1														1
	茶壺										31					31
	燭台							1								1
志戸呂	卸皿										1					1
	擂鉢														1	1
	計	4	8					8	36	51	104			1		212
瀬美	型式	1~5	6a	6b	7			8	9		10		11		12	
	壺	1														1
常滑	片口鉢	10	3	6			20		3	他17						59
	壺	4														4
	甕	3		16	95		90		65							269
	計	4	14	19	101		110		68	17						333
土器小皿				1		1			1							3
内耳土鍋					1		1				102					102
	計									1	102					105
合計		5	18	28			119		162		332			1	1	666

## 2. 木製品について

中世木製品のほとんどは中島遺跡の井戸跡、溝など、地下水に安定的に漬かっている所から出土し、陶磁器と同じように建物跡周辺からは見られなかった。木製品の種類は漆器の什器、折敷、形代などのほか、破片となって原形不明なものが多く含まれ、腐食して分からいものは少なく、概して木製品としての保存状態は良好であった。

漆器では碗と皿、それに不明形態のものの計3点が49号土坑から出土した。碗・皿は木胎部が0.4cmと薄く、黒地に赤で鳥が飛ぶ図柄をあしらっている。共にその筆致が同じであることから同時代の同じ職人の手によるものと思われる。分析の結果、木胎の材質は皿がクリ、碗がブナで、共に硬い材質を薄く削り、これに炭粉を付けた上に透明漆を塗ってこれを下地に、ベンガラを混ぜた赤漆で図柄を描いている。その木胎の薄さと図柄から、14世紀代のものと推定される。



写真107 出土した漆器

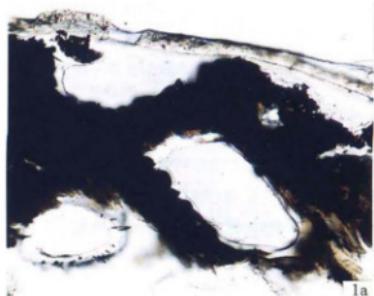


写真108 出土した木製品

木製品で最も多く出土したものは、薄く長い板状のもので、おそらく折敷と考えられる。長いものは30cm、幅4cm程度のものがあるが、多くは断片となっているため、原形は復元できない。またこれと並んで幅1cm程度の目釘穴があるものがあり、これを側板とし、前者を底板と考えると、方形とした場合30cm角の折敷であったろう。折敷の樹種はほとんどがヒノキで、スギが2点あり、やはり清浄さを意識したものであったと思われる。そのほか、形代として刀形、羽子板があり、実用品としては籠状のもの、栓、矯木のようなものなどがあり、全体として中世で特徴的な木製品の組成を示す。

## 3. 砥石について

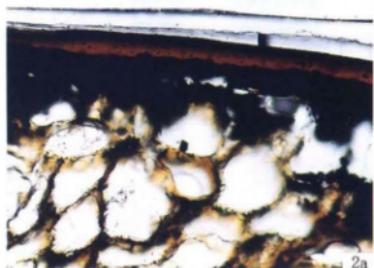
砥石は芝崎遺跡で古代のものを含めると100点を越え、中島遺跡でも100点近く出土している。砥石といえばいわゆる天草砥石に代表される、白色の流紋岩製の中砥が有名である。両遺跡でもこの流紋岩製の砥石が主流を占め、この砥石が関東でも群馬県の沼田市、南牧村などで産出することは知られ、おそらく芝崎・中島遺跡で出土したものの多くは、この群馬産砥石と思われる。遺跡で出土する砥石の形態は細長い角柱状に両先端が細くなっているもの、中央部が細くなっているもの、穴が開いて片端が細くなっているもの、山形になっているものなど、様々な形態があるがこれは使った結果であって、元の形は羊羹のような角柱状であったと思われる。砥石は言わずと知れたごとく刃物を研ぐ道具であり、その道具に結果としてこれだけの形態が発生するの



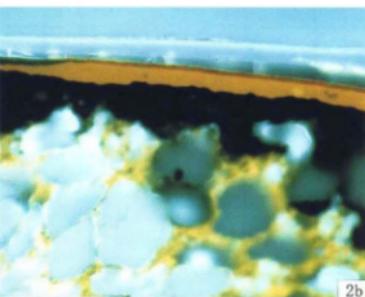
1a



1b



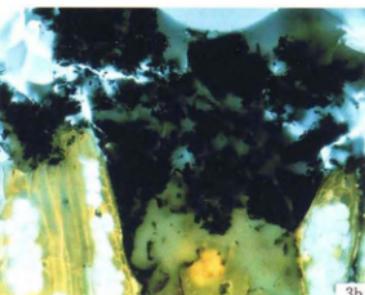
2a



2b



3a



3b

100 μm

1. 49号土坑 No.15
  2. 49号土坑 No.17
  3. 49号土坑 漆器
- a : 透過光. b : 落射蛍光

写真109 漆器の断面顕微鏡写真 (バリノサーヴェイ提供)  
(詳しい説明は資料編3、自然科学分析に所収)



写真110 中島遺跡出土の砥石



写真111 線刻砥石



写真112 中島遺跡出土の茶臼・石鉢



写真113 中島遺跡出土の土錘

は、その対象物である刃物に様々なものがあったことが考えられる。現在でも農家の人が鎌を研ぐのをみると、鎌の刃を立てて砥石を動かしている。その結果として、砥石の中央部が細くなるが、また人の癖によつて先端が細くなる場合もあるようである。遺跡から出土したものを見ると、特に古代のものでは中央部が細くなっているものが多く、中世から近世のものでは両先端が細くなっているものが多い傾向を示す。

中世の砥石には、流紋岩製の砥石だけでなく、焼き物の破片—陶片を利用したものがよく見られる。利用される陶片は常滑片が多いが、中島遺跡では須恵器片を利用したものが多く出土した。その多くは割れ口を擦っているものが多く、器面を使っているものは少なく、これを砥石としてみるか疑問の余地は残るが、ここでは砥石の範疇としておく。

このほか、遺跡から出土した砥石では砂岩製のもの、粘板岩製のものがある。砂岩製のものは銚子産砂岩を使っていて最も入手しやすい石であるが、これは荒砥用である。粘板岩製は硬く緻密であるため仕上砥に使われるが、出土数は少なく、特別な刃物たとえば刀剣を研ぐものが考えられる。

#### 4. 土錘について

土錘は中島遺跡で30点弱、芝崎遺跡で1点、長さ7～8cm、径5cm程度の比較的大形のものが出土した。出土した遺構から中世の所産であることが分かったが、この時代の土錘の出土例としてはあまりないので、何に使われたものか判断はできないものの、遺跡の立地環境を考えたら、魚網の錘として使われたことが有力である。

#### 参考文献

小野正敏編（2001） 図説・日本の中世遺跡 東京大学出版会

## 5. 安土桃山・江戸時代（近世）

### 1) 遺構について

安土桃山・江戸時代の近世になると、芝崎遺跡では溝と道跡が見られるだけになり、中島遺跡では遺構がほとんど見られなくなる。芝崎遺跡の溝や道跡は前にも述べたように、現在の畠地割の下から多くが検出されたことは、図38を見れば一目瞭然である。その中で中央より少し西寄りの所にある南西—北東方向に走る数条の溝は、中世の項でも示した溝にはば一致し、中世から継続したものであることは明らかである。また、その溝が栗山川に突き当たった所に、渡船場が在ったと言われ、つい数十年前まではこの溝に沿って道があったことが確認された。芝崎遺跡では近世になるとこのように中世より継承された道跡や溝を利用し、さらに細かい地割などをして主に畠地として使われ、集落は現在もある台地下の西蓮寺を中心に形成され、今日に至ったものと思われる。



図38 芝崎遺跡の

## 2) 遺物について

近世の出土遺物は、中世に引き続き陶磁器が主なものになる。芝崎遺跡群で出土した近世陶磁器はすべて国产陶磁器で、16世紀末の安土桃山時代の瀬戸・美濃（16世紀になると瀬戸の北を越えて現在の岐阜県多治見市や土岐市などに陶器生産が拡大あるいは移動した）製品があり、江戸時代前期の17世紀になるとその登場で焼かれた皿・天目碗が多くなる。これに中期になると九州北部の有名な磁器产地の有田製品、またその近くの波佐見製品の染付碗・皿が増えてくる。その中には当時ブランド品であった鍋島の皿もあり、芝崎には比較的裕福な農民もいたことが推定される。このほか瀬戸・美濃製品では香炉・擂鉢・堺・明石系の擂鉢などがあり、产地によって作られる製品の住み分けが起こっていた様である。

近世の遺物ではこのほか、煙管、土面子など新しい文化のものが増え、錢貨も数点出土し、漆器碗も1点ある。しかし、生活の拠点が移動してしまったため、中世に比較すると全体的に遺物は貧弱になっている。



近世遺構分布

## 6. 発掘調査成果のまとめ

芝崎遺跡群はこの埋蔵文化財調査で低地にある4箇所の遺跡—芝崎遺跡・中島遺跡・三反田遺跡・弥平野遺跡—を発掘し、それぞれ個別的ではなく、相互に関連した資料を得ることができたのが最も大きな成果である。古いほうから見ると、縄文時代では各遺跡で土器が出土し、特に中期から後期にかけて土器の出土変化を見ることによって、人々の移動変遷を推定することができ、生活の定住性は認められないまでも、低地での生活様式がつかめそうである。

弥生・古墳時代は生活の痕跡は認められないものの、遺物が僅かながら出土し、この時代に人々が芝崎の低地に足を踏み入れていたことは確かである。

奈良・平安時代になると、住居跡や掘立柱建物跡などが出で、この芝崎低地に本格的に人々が住み始めたことが分かる。そしてこの時代で大きな成果は、芝崎遺跡と中島遺跡で烟跡が検出されたことである。これまで古代の烟跡は関東では火山灰が厚く堆積する群馬県で多く発見されることが多く、火山灰堆積が薄い千葉県では古墳下等で僅かに検出されたのみであった。また、低地では水田跡が発見されることはあったが、芝崎遺跡のように烟跡が4万m<sup>2</sup>もの大規模に検出されたのは県内で初めてである。芝崎遺跡群で確認した烟跡は、地山の砂層を掘り込んだ畝溝として検出され、前述したように上層の黒色土と砂とを搅拌するために、掘られたことが推定された。この烟跡で何を作っていたか興味を引くところで、そこで烟跡の土壤を自然科学分析した。その結果、イネ属やヒエ・アワの細胞珪酸体が検出され、これらが作られていた可能性がある。花粉化石は検出されなかつたため、他の栽培植物は不明であった。芝崎遺跡群ではもう一つ注目されるのは、掘立柱建物跡群である。芝崎遺跡の中央部と中島遺跡で検出され、比較的大きな建物跡から小規模なものまで、ある程度規則的に立ち並んでいたことが想像された。この掘立柱建物跡群がどういう施設であるか興味あるが、直接的に推定せる資料が出土しなかつたため、さらに今後の検討を要しよう。平安時代の集落は中期の11世紀頃まで烟と共に継続したが、この後断続している。

中世の鎌倉・室町時代になると、芝崎は九十九里平野の縁辺を走る街道と、栗山川を使った水運の十字路であったことが想定され、その要衝を押さえ且つ富を得た有力者が居た所として中島遺跡の存在を考えてみた。芝崎遺跡では街道筋と思われる道路や溝、それに付随するように集落跡が検出され、この集落は決して下層農民のものではなく、出土遺物からある程度富裕な農民であったことが推定される。中島遺跡では溝に囲まれた居館が形成され、庭園のような溝が廻り、富裕なだけでなく文化的な素養も有していた有力者がいたことを思わせた遺跡であることがあきらかとなった。

近世の安土桃山・江戸時代は中世の遺跡や溝を継承し、その溝は今日まで見られる畑の地割として残り、道跡は近年まであった道にまで続いていることが、地元の方からの聴取や迅速図から明らかとなった。このように芝崎では、今日のようが一朝一夕にできたのではなく、遠い昔からの歴史の中で形成されてきたことが、埋蔵文化財調査によって改めて確認することができた。

報告書抄録

ふりがな	しばさきいせきぐん							
書名	芝崎遺跡群							
副書名	国道126号山武東總道路建設に伴う埋蔵文化財調査							
巻次								
シリーズ名	財団法人東總文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	道澤 明・本多昭宏・白崎智隆・津田憲司・蜂屋孝之							
編集機関	財団法人 東總文化財センター							
所在地	〒289-1727 千葉県匝瑳郡都光町宮川字宮内前2334 TEL. 0479-84-3368							
発行年月日	西暦2006年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	所	在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
芝崎遺跡	千葉県匝瑳郡都光町芝崎字 仲ノ内1329番地ほか	12381	H47	35度 39分 59秒	140度 29分 37秒	20000107 ~ 20040318	37,200 m <sup>2</sup>	国道126号山武東總 道路建設に伴う事前 調査
中島遺跡	千葉県匝瑳郡都光町芝崎1661 番地ほか	12381	H49	35度 40分 06秒	140度 29分 02秒	20010227 ~ 20050302	8,500 m <sup>2</sup>	
赤平野遺跡	千葉県匝瑳郡都光町芝崎2090 番地ほか	12381	H48	35度 40分 02秒	140度 29分 55秒	20010314 ~ 20030210	810 m <sup>2</sup>	
三反田遺跡	千葉県匝瑳郡都光町芝崎2425 番地ほか	12381	H56	35度 39分 59秒	140度 30分 17秒	20000703 ~ 20010319	820 m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
芝崎遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴遺構1基			中~晚期土器、石鏟、石斧	遺跡全体に奈良・平安時代の堅穴住居跡と烟跡を検出。当時の農村集落を復元することができる。また、遺跡中央部では掘立柱建物跡群があり、農村集落の構造も推定可能となろう。	
		古墳時代				土師器、勾玉		
		奈良・平安時代	堅穴住居跡184軒、 掘立柱建物跡62棟、 土坑54基、 鐵治遺構1基 烟跡			土師器、須恵器、 綠釉陶器、灰釉陶器、基石		
		中世	掘立柱建物跡14棟 道路跡、溝 烟跡			中国製青磁・白磁、染付 古窓戸・常滑・渥美 内耳土鍋 砥石		
		近世	溝			窓戸・美濃、 肥前系染付 (鍋島)		
中島遺跡	集落跡	縄文時代	炉跡様土坑1基			中~後期土器、土鍤、磨石、石皿	奈良・平安時代では整然と並んだ掘立柱建物跡群と綠釉陶器等から、公的な施設があったことが考えられる。中世では廣く開まれた居館跡とその南側に水田跡が検出され、有力者がここに居住していたことが分かった。	
		弥生時代				有角石器		
		古墳時代				土師器高壙、壺、 勾玉		
		奈良・平安時代	堅穴住居跡1軒 掘立柱建物跡22棟 土坑43基、火葬坑5基 粘土貼土坑16基、 井戸跡、溝			土師器、須恵器、 綠釉陶器、灰釉陶器、 三足壺 井戸棒		
		中世	掘立柱建物跡14棟 土坑43基、火葬坑5基 粘土貼土坑16基、 井戸跡、溝			中国製青磁・白磁 古窓戸・常滑・渥美 染器、木製品、井戸棒		
近世				窓戸・美濃、肥前系染付				
弥平野遺跡		縄文時代				後期土器		
		奈良・平安時代				土師器		
		近世				窓戸・美濃、肥前系染付		
三反田遺跡		縄文時代	炉跡1基			後期土器		
		奈良・平安時代				土師器		
		近世				窓戸・美濃、肥前系染付		

財団法人東総文化財センター発掘調査報告書第33集

芝崎遺跡群

—国道126号山武東総道路建設に伴う埋蔵文化財調査—

本編

(芝崎遺跡・中島遺跡・三反田遺跡・弥平野遺跡)

平成18年3月24日発行

編 集 財団法人 東総文化財センター

発 行 千葉県道路公社

千葉県千葉市中央区中央4-13-28

財団法人 東総文化財センター

千葉県匝瑳郡光町宮川字宮内前2334

印 刷 株式会社 東ブリ

千葉県船橋市咲が丘1-11-9